

研究紀要

第27号

土偶研究とジェンダー考古学（II）

小野美代子

古墳時代における木製品出土状況の解釈

山本 靖

川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（I）

福田 勝

赤熊 浩一

岡本 千里

澤口 美穂

大屋 道則

模倣坯の製作工程

大屋 道則

岡本 千里

埼玉県内横穴式石室の事例集成

青木 弘

2013

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序

- 土偶研究とジェンダー考古学（II） 小野美代子（1）
- 古墳時代における木製品出土状況の解釈 山本 靖（17）
- 川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（1）
福田 聖 赤熊浩一 岡本千里 澤口美穂 大屋道則（33）
- 模倣坯の製作工程 大屋道則 岡本千里（69）
- 埼玉県内横穴式石室の事例集成 青木 弘（79）

川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（1）

福田 聖 赤熊浩一 岡本千里 澤口美穂 大屋道則

要旨 川越田遺跡H地点の第1号祭祀跡からは、100個体を超える手捏ね土器をはじめとして、600点以上の遺物が出土した。

ここでは、6世紀中頃から後半に比定される川越田遺跡第1号祭祀跡について、遺物の分布に着目する事により、具体的な祭祀のあり方を検討した。

その結果、第1号祭祀跡は、2～3個を1組とする手捏ね土器を使用した祭祀が30～50年程度継続して営まれた痕跡であり、おおよそ数年ごとに僅かに地点を替えながら、連続と行われた祭祀の重複した形態であると想定できた。なお、手捏ね土器の研究史と分類については後篇で、手捏ね土器と土師器環との関連性については別稿でそれぞれ示した。

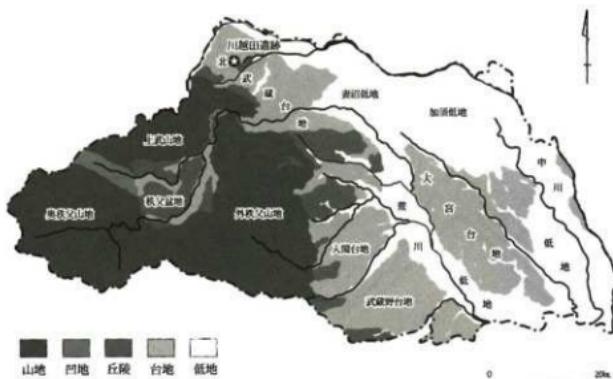
はじめに

埼玉県本庄市に所在する川越田遺跡からは、2010～11年度に行われたH地点の調査で、手捏ね土器127点、白玉55点を含む祭祀跡が検出された。この第1号祭祀跡は遺構としては必ずしも明確ではなかったが、遺物包含層の分布範囲として確認され、最終的に600点余りの遺物が出土した。

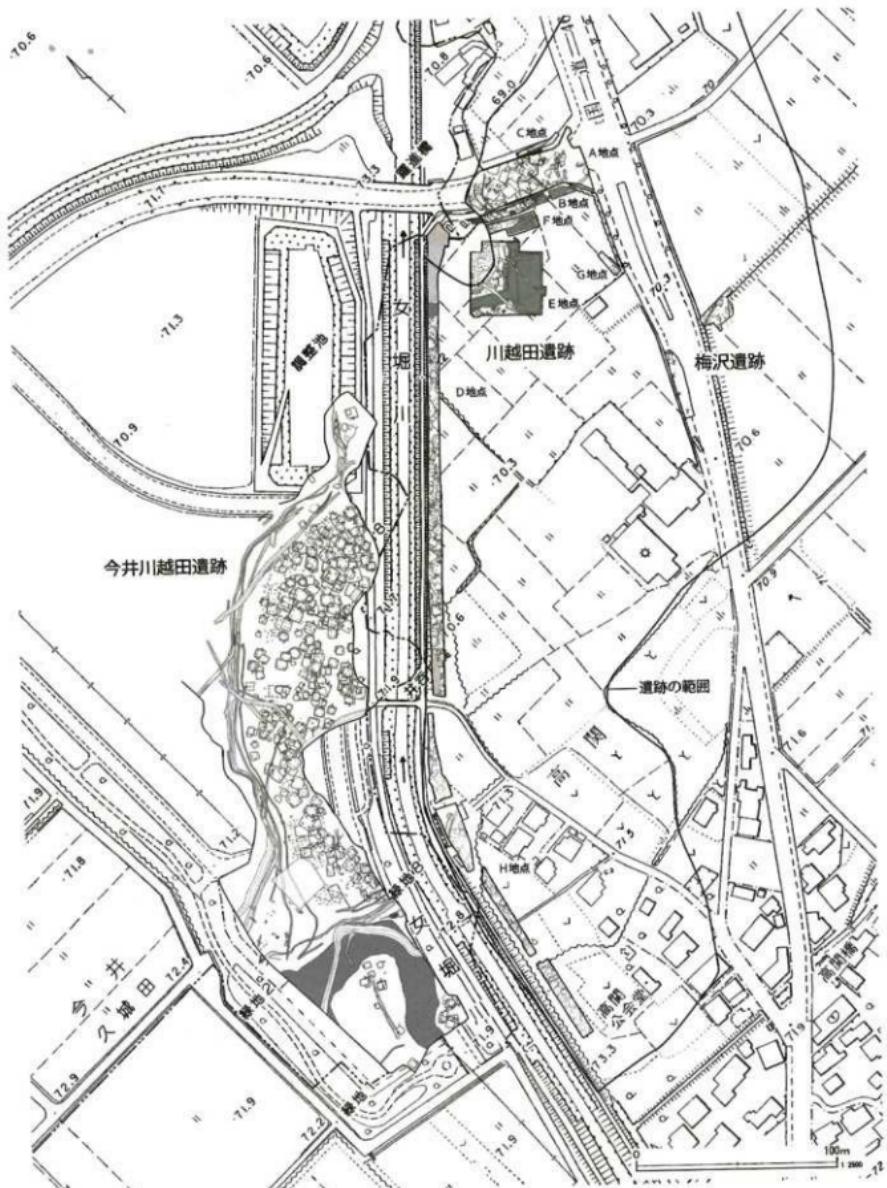
第1号祭祀跡からは、手捏ね土器や白玉の他にも、土師器環、土師器甕、須恵器破片、金属器なども検出されており、古墳時代後期に集落内で行われた祭祀の形態を検討する上で、重要な資料である。

ここでは、冒頭で川越田遺跡及び第1号祭祀跡について概要を示し、第2章で、第1号祭祀跡から出

土した土師器に着目して、おおよその年代を示した。第3章では、第1号祭祀跡出土遺物全体の分布を検討し一定のまとまりを認定した後で、新旧関係の想定を行った。第4章では、それぞれの遺物種類毎の分布に注目し、祭祀の場でのあり方を推定した。以上までの点を総合的に検討し、小結では第1号祭祀跡の実態について推定した。



第1図 川越田遺跡の位置



第2図 川越田遺跡の概要

1 川越田遺跡と第1号祭祀跡の概要

川越田遺跡は、本庄市大字今井から本庄市児玉町大字高岡にかけて所在する。女堀川中流域の自然堤防上に立地する古墳時代の大規模集落である。

これまでに、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、児玉町教育委員会（現本庄市教育委員会）によってA-Hの8地点の調査が実施され、検出された竪穴住居跡の総数は192軒にのぼる。内訳は古墳時代前期38軒、古墳時代中期9軒、古墳時代後期129軒、平安時代1軒、不明15軒である。

集落は古墳時代中期に一時的に縮小するが、古墳時代全般を通じてほぼ継続的に営まれていたようで、安定性の高い集落である。特に6世紀中葉以降の住居跡が多く検出されている。

遺跡の西には古墳時代から平安時代の住居跡が328軒検出された今井川越田遺跡が隣接し、同一の集落であったと考えられている。

一方、河川跡は各調査地点で検出されており、大きく二つに分けて考える事ができる。一つは圃場整備以前の中・近世の流路である現在の女堀川の旧流路であり、もう一つは古墳時代前期末に流路が形成され、古墳時代中・後期には本流であったと考えられる河川跡である。

後者の最下層からは古墳時代前期末の遺物が出土し、覆土中からは古墳時代中～後期の遺物が出土している。今井川越田遺跡の調査区南端でも同時期の河川跡が検出されており、川越田遺跡の河川跡と同一の流路であるか、本流、あるいは支流の関係にあると考えられる。

祭祀跡は、川越田遺跡H地点、今井川越田遺跡で各1箇所、それぞれ河川跡に面して検出され、いずれも6世紀中葉前後の集落の拡大期に当たるものである。

川越田遺跡の祭祀跡は、H地点A区の南端、古墳時代の河川跡に面した緩斜面に形成されている。手捏ね土器を主体とし、白玉、土師器壺、甕、鉄鎌が検出されている。



第3図 川越田遺跡の遺構概要

2 祭祀の年代

第1号祭祀跡からは、第4図に示した土器群が出土している。

土師器坏は、いずれも須恵器模倣坏である。1～8、13～15、17、18は坏蓋模倣坏、9、10、19是有段口縁坏、11、12、16、20は坏身模倣坏である。

坏蓋模倣坏は、口縁部の形態が外側にやや開く段階である。口径は12.4cm～13.8cm、器高は4.0cm～4.6cmである。

この中で、1の坏は口縁部がやや直立気味で口径が12.1cmと小振りの形態でやや古い様相を持っている。一方、7の坏は口縁部が外反し、口径14.6cmとやや大型化の傾向が認められる。主体をなす2～4の坏は口縁部が外側にやや直線的に立ち上がり、口縁部と体部を画する稜は明瞭である。5～8の坏は口縁部が外傾にやや外反気味に立ち上がり、口唇部で更に開く形態である。8の口唇端部は丸く肥厚し開いている。口縁部と体部を画す

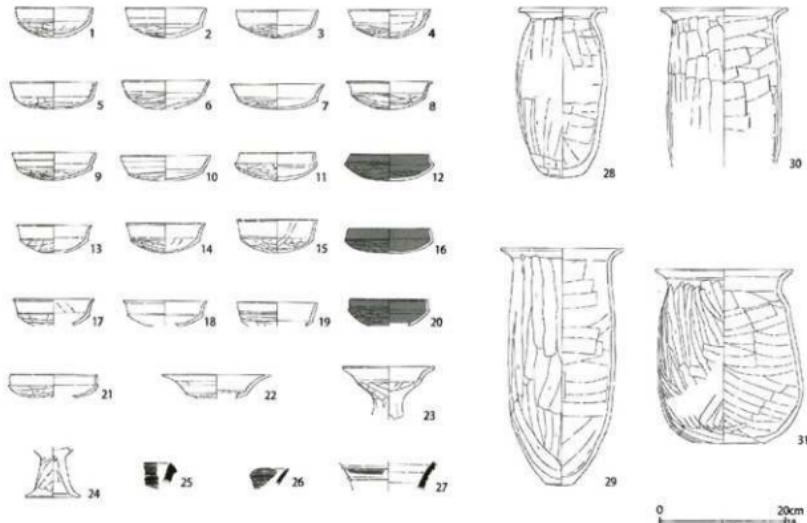
る稜はやや形骸化した傾向をもつ。坏の器高に占める口縁部高さの比率は、1／2を下回る。5、7は体部の器高が更に低く扁平傾向となる。

これらの特徴は、川越田遺跡（大谷2010）Ⅶ期、今井川越田（磯崎1997）第Ⅲ期を中心とした段階と考えられる。

有段口縁坏は少量ながら共伴する。口縁部は外傾に外反し、中位に屈曲する段を有する。口径12.8cm～14.1cm、器高3.7cm～4.5cmでやや大型化しつつある段階と見てよい。

坏身模倣坏は、一定量の出土が認められる。黒色処理が施されるものが多くなる。口径は11.8cm～14.0cm、器高3.7cm～4.4cmである。11は口径が小さく、器高もやや深みであることから古い段階の坏と考えられる。

壺は、いずれも長胴化の傾向が認められる。28は口径14.0cmに対し、胴部径14.5cmで胴部に最大径をもち、古い要素を残している。形態は口縁部



第4図 第1号祭祀跡出土の土師器と須恵器

が「く」の字状に短く大きく反り返る。一方、29、30の甕は口縁部に最大径をもち、その形態は口縁部が「く」の字状に短く反り返る。また、胴部はほぼ直線的に伸びるが、胴部下位にわずかな膨らみを残す傾向が見られる。底部は直径4.5cmと小振りで、この時期の甕の底部は一般的に円盤状の底部粘土版が突出し、胴部との立ち上がり部に段を作ることから、やや新しい段階の傾向が認められる。

これらの甕の特徴から、前者は川越田VI期、後者は川越田VII期の段階を見て良いであろう。

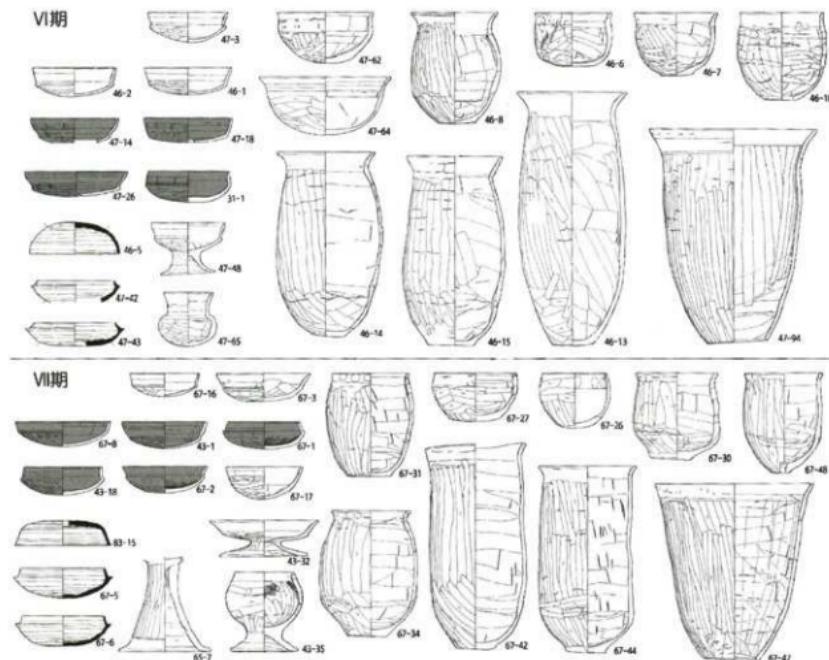
高坏は、和泉型高坏が残存している。22は口径が大きく口縁部がやや短く大きく外反している。外面体部との境の稜は形骸化している。23はさらに退化傾向の強い高坏で、体部との境の稲は口縁

部ヨコナデと体部ヘラケズリの調整による違いで表現され、稜は明瞭ではない。

和泉型高坏の終末と捉えることができ、川越田VI期の段階と考えられる。

このように、第1号祭祀跡から出土した土器群には、川越田VI期～VII期の様相が認められた。VI期に先行する段階は川越田遺跡（富田・赤熊1985）第1号住居跡が上げられ、口縁部が直立し、器高が深い丸底形態の壺蓋模倣坏を主体とする。

大谷はVI期に該当する第46号住居跡からTK10型式の須恵器壺蓋が共伴することに着目し、この段階を6世紀中葉～後葉に比定している。ここでは大谷の考えに準拠し、第1号祭祀跡の時期を6世紀中葉から後半に位置づけておきたい。



第5図 6世紀中頃の土師器の変遷

3 遺物の分布

第1号祭祀跡からは破片も含めて、手捏ね土器127点、白玉55点、滑石製模造品5点、模倣环83点、甕類334点、高环8点、鉄製品24点、礫18点などの遺物が出土している。第6図に川越田遺跡第1号祭祀跡の概要を、第7図に遺物出土状況の概要をそれぞれ示した。

ここでは、これらの遺物の分布状況について具体的に検討した。

3-1 遺物全体の平面的分布

第1号祭祀跡から出土した遺物を平面的に見ると、全体に均質に分布しているわけではないことがわかる。遺物の分布範囲は大きく二つに分かれている。今、この分布の大きなまとまりを群と呼び、各々をA群、B群とする。遺物は、更に各群の中でも均質に分布しているのではなく、比較的密にまとまっている部分と、そのあいだの疎な部分から構成されている。この分布密度が密な部分について、ブロックと呼び、各々を第1ブロック、第2ブロック、…とする(第8図)。

A群は4個のブロックから構成され、B群は、11個のブロックから構成されている。第5、9、11のブロックは遺物の密度が高く、第7、12、15のブロックは遺物の密度が低い。遺物の密度が高いブロックは、南西側のまとまりの中では、北西から南東に向けて続いているように見え、その周辺に遺物の密度が低いブロックが分布しているよう見える。

3-2 遺物全体の立面的分布

遺物全体の立面的分布を見てみると、やはり均等ではなく、先に認定した各ブロック毎に、一定の高さにまとまっている(第9図)。

各ブロックの特性を明らかにするために、遺物の高さ(標高)について、低い順にグラフにプロットした。この結果、ブロック毎に異なる高さの範囲に遺物が分布している事が明らかであった(第10図)。

この図を詳細に見てみると、ブロック内での遺物の高さの傾向から、幾つかの類型が識別できる。第5ブロックでは、遺物は横方向に比較的同じ高さに分布しており、その前後により低いものとより高いものが見られる。このような分布についてf型とする。また第14ブロックでは、f型が縦に二つ連続した形態を成している。これを縦連f型とする。更に第3ブロックでは、遺物の分布に特定の深さに偏りが見られず、直線的となっている。これをI型とする(第11図)。

これらの各類型の具体的な成立原因について、以下のように推定した。

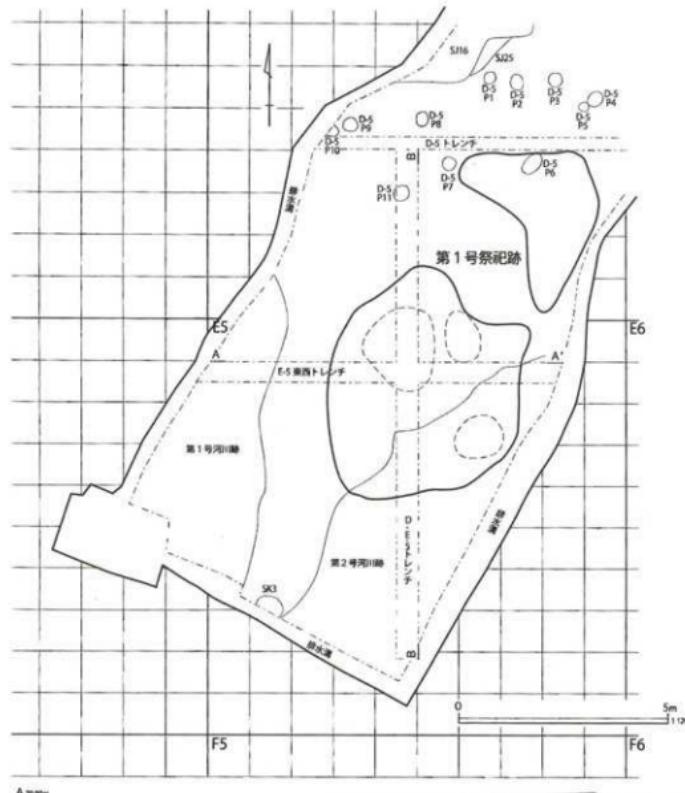
祭祀行為の中で地表面に器材が置かれると、その器材は接地面で、当初は一定の高さ(地表面の高さ)を示す(第12図ア)。やがて、多少埋没しながらも様々な要因により擾乱を受けると、本来の接地面よりも深い位置に分布する遺物が見られるようになる(第12図イ)。更に埋没が進みながら、その場が耕作などの擾乱を受けると、遺物が上層に巻き上げられ、本来よりも高い位置にまで遺物の分布が広がる(第12図ウ)。より一層擾乱が進めば、原位置を反映した面的な分布は、その痕跡さえも失われる(第12図エ)。

f型の分布はこのようにして成立したものである。また2連f型のブロックは、ほぼ同一地点で、時間の異なる二つのブロックが重複して成立したものである。一方I型のブロックは、擾乱など後世の作用が強く働き、原位置に存在する遺物が殆ど見られなくなつたものである。

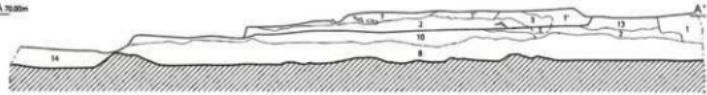
第1号祭祀の各ブロックでは、第5、6、10、13ブロックが典型的なf型の分布を示し、第9、14ブロックは2連f型の分布を示す。また、第1~4、7、8、11、12、15ブロックはI型の分布を示す。

これらの仮説に基づけば、f型分布を示すブロックについては、出土遺物の標高が比較的そろつた部分が、本来の遺物分布面であると推定できる。

なお、2連f型分布を示す第9ブロックと第14



A 20m



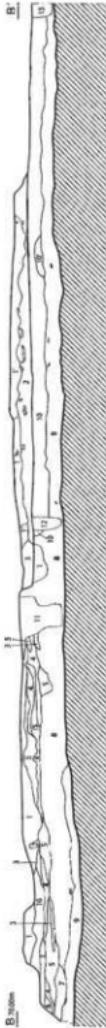
第1号祭祀跡

- 1 灰黄褐色土 塵土・炭化物微量 白色砂粒子多量 しまり・粘性有
- 1' 灰黄褐色土 1層と同じ 砂利層(3層)が部分的に堆積する
- 2 黑褐色土 塵土・炭化物を均等に含む 白色砂粒子含む しまり・粘性有
- 3 灰黄褐色土 砂礫層 1層中に砂利・小石を多く含む

トレンチ

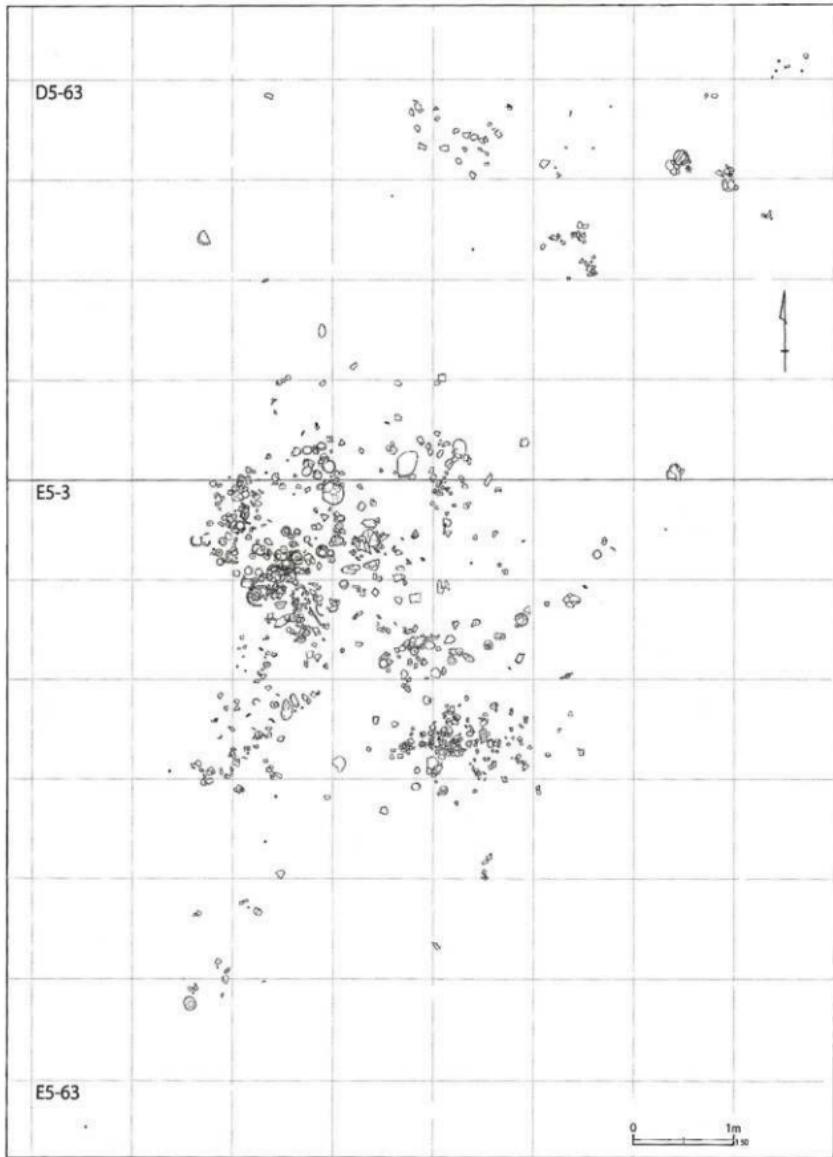
- 1 灰黄褐色土 砂利・砂主体 しまり弱 粘性なし (祭祀跡3層)
- 2 灰黄褐色土 砂多量 しまり・粘性有
- 3 黑褐色土 砂利・砂主体 しまりなくもろい
- 4 灰黄褐色土 砂主体 しまり・粘性弱
- 5 灰黄褐色土 塵土・炭化物粒子微量 砂多量 しまり・粘性やや有
- 6 黑褐色土 塵土・炭化物粒子微量 砂少量 しまり・粘性有
- 7 磷鉄色土 粘質土 塵土・炭化物粒子少量 下面にマンガン粒子付着 しまり・粘性有
- 8 黑褐色土 砂質土 塵土・炭化物粒子を均等に含む しまり・粘性有
- 9 黑褐色土 塵土層 しまり有 粘性弱
- 10 黑褐色土 塵土層 塵土・炭化物粒子を均等に含む しまり・粘性有 (祭祀跡2層)
- 10' 黑褐色土 10層と同じ 地山ブロック混入

- 11 黑褐色土 砂利主体 黒褐色土が充填する しまり有 粘性なし
- 12 黑褐色土 砂利少量 しまり・粘性有
- 13 喀斯特土 塵土・炭化物粒子均等に含む 砂利層中に混入 しまり・粘性有
- 14 湿灰色土 第1号河川跡 しまりなくもろい
- 15 黑褐色土 塵土・炭化物粒子含む しまり・粘性有

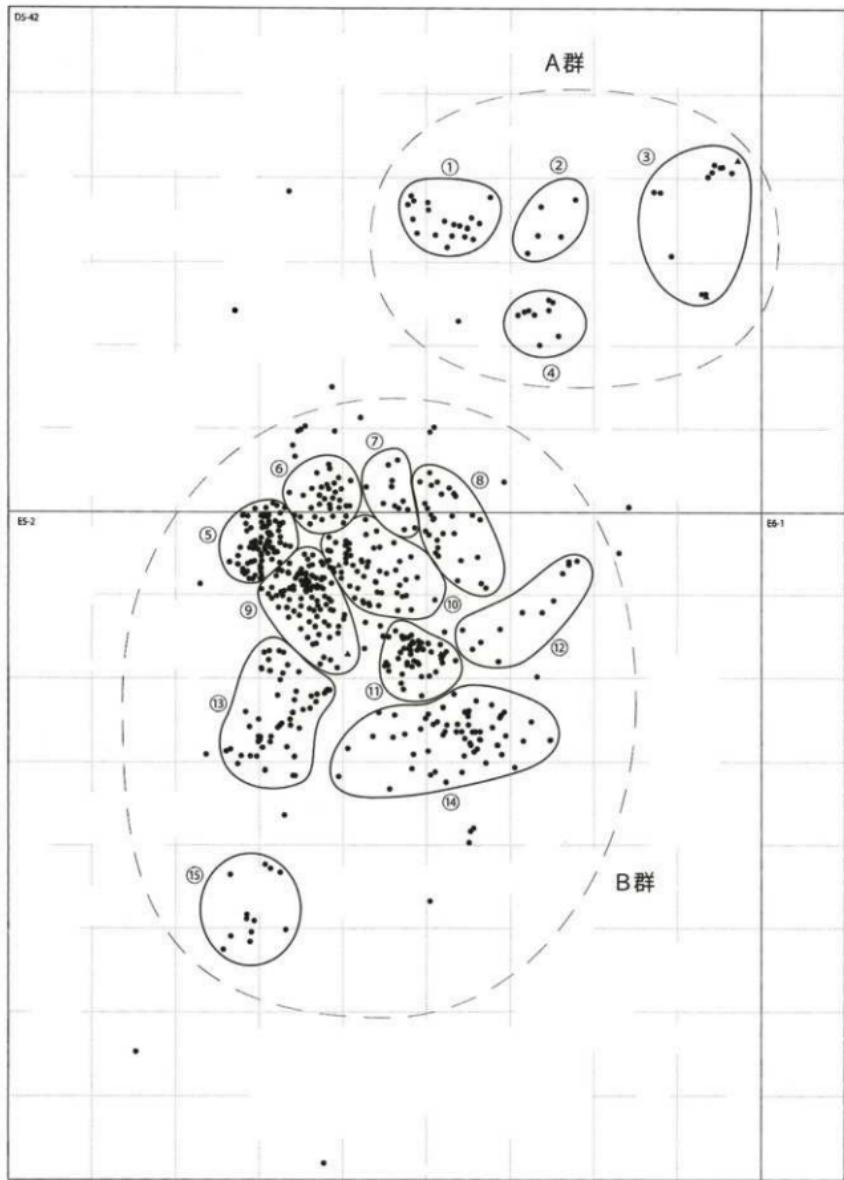


B 20m

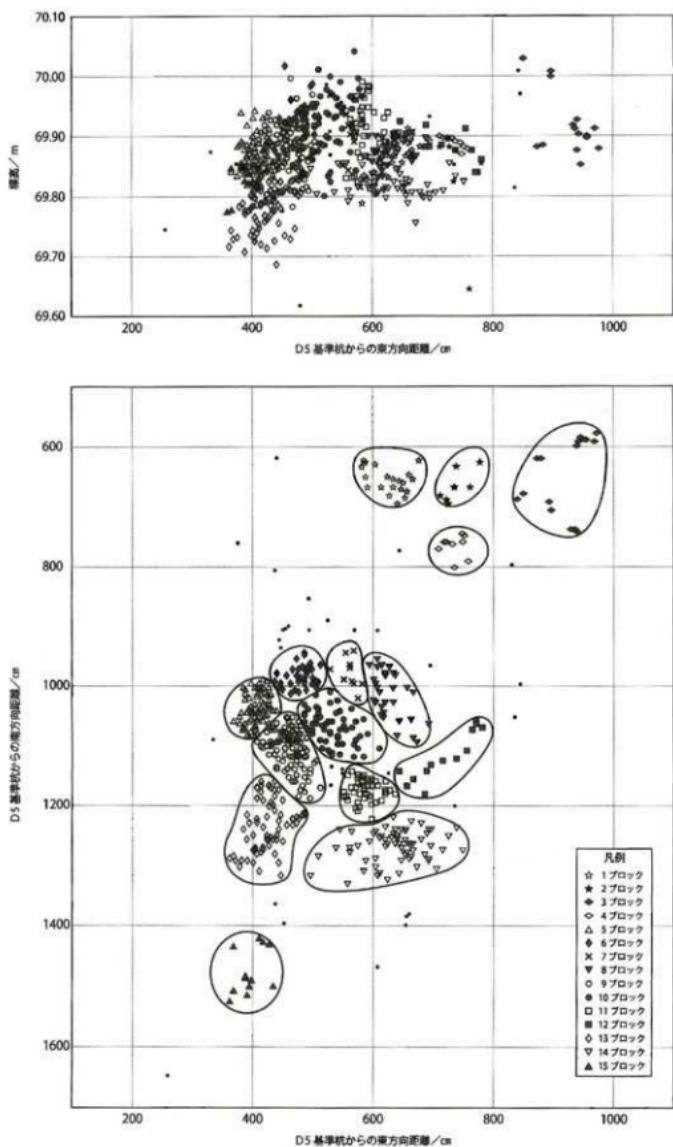
第6図 川越田遺跡第1号祭祀跡の概要



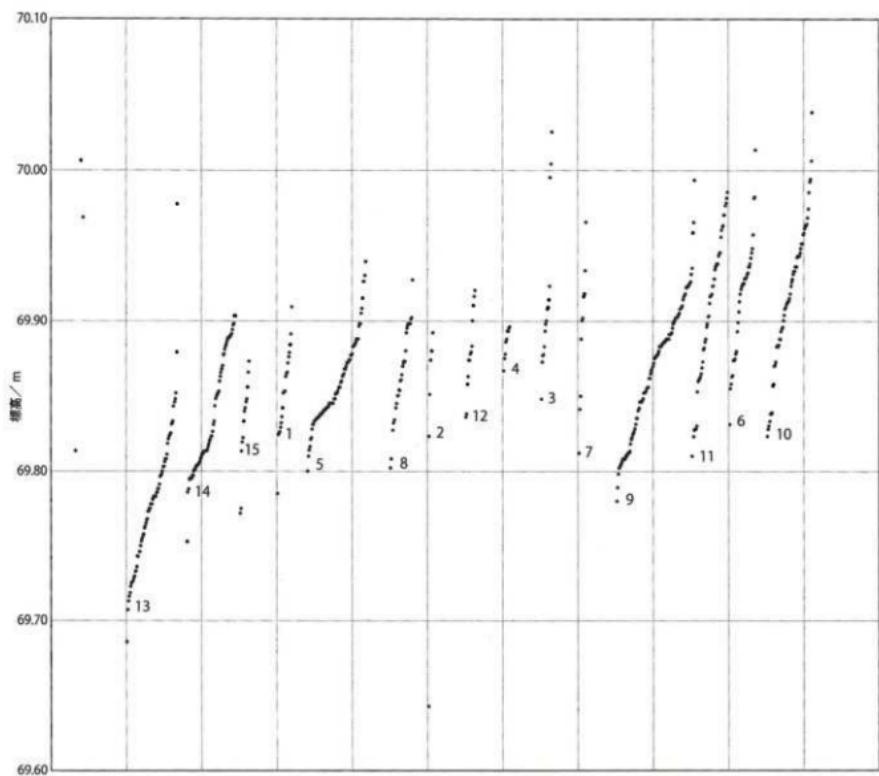
第7図 川越田遺跡第1号祭祀跡遺物出土状況の概要



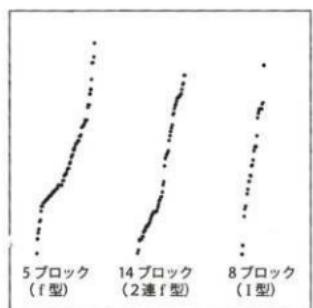
第8図 1号祭祀跡出土遺物の群とブロック



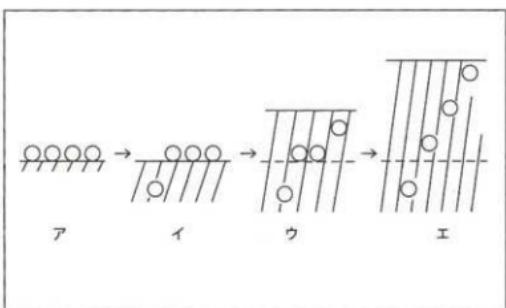
第9図 1号祭祀跡出土遺物の平面的分布と立面的分布



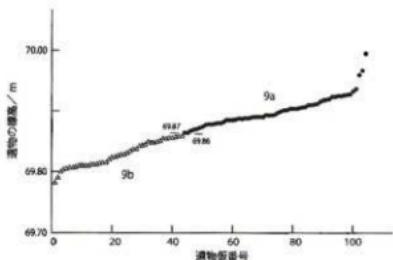
第10図 1号祭祀跡出土遺物のブロック毎の高さの傾向



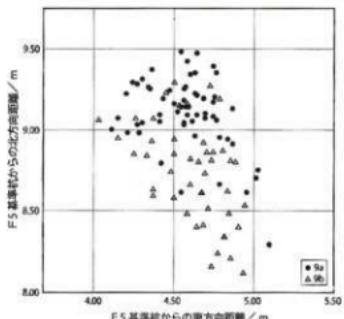
第11図 遺物の立面的分布傾向の諸類型



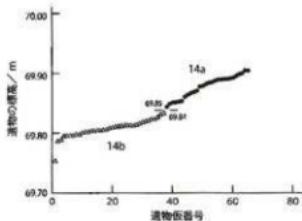
第12図 遺物の立面的分布の変遷



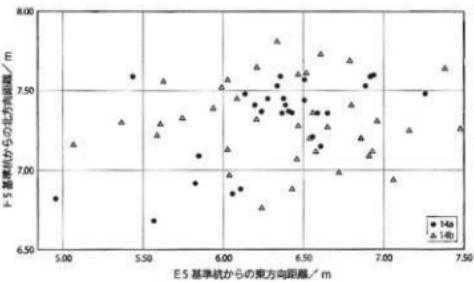
第13図 9 ブロック立面分布の分離



第14図 9 ブロック平面分布の分離



第15図 14 ブロック立面分布の分離



第16図 14 ブロック平面分布の分離

ブロックについては、二つのブロックの重複として捉えた。すなわち、第9ブロックでは標高69.87m以上の高さのものを9aブロックとし、それ以下のものを9bブロックとして分離した。また第14ブロックでは、標高69.85m以上の高さのものを14aブロック、それ以下のものを14bブロックとして分離した（第13、15図）。

分離後の遺物を平面図にプロットしたものが第14、16図である。第9ブロックは比較的鮮明に9a、9bの二つのブロックに分離する事ができた。第14ブロックについても、平面分布についてある程度分離する事が可能であった。

もちろん、擾乱によってf型分布が成立する以上、2次f型ブロックの分離は厳密ではない。

3-3 ブロックの新旧関係と分布の意味

既に見てきたように、第1号祭祀跡から出土した遺物は、平面的にも立面上にも様々なまとまりをもって分布していた。第2章で示したように、出土した土師器からは30~50年程度の継続期間が想定できた。この事から、第1号祭祀跡での祭祀行為が、一回起的に満遍なく遺物を均質に設置して行われていたのではなく、1m前後の比較的小な範囲内に遺物の設置が行われ、このような祭祀行為が場所を変化させながら行われ続けたと理解すべきであろう。

既に述べたような原理に基づき、f型分布が典型的に見られるブロックにおいては、本来の遺物分布面の高さを推定することが可能である。そし

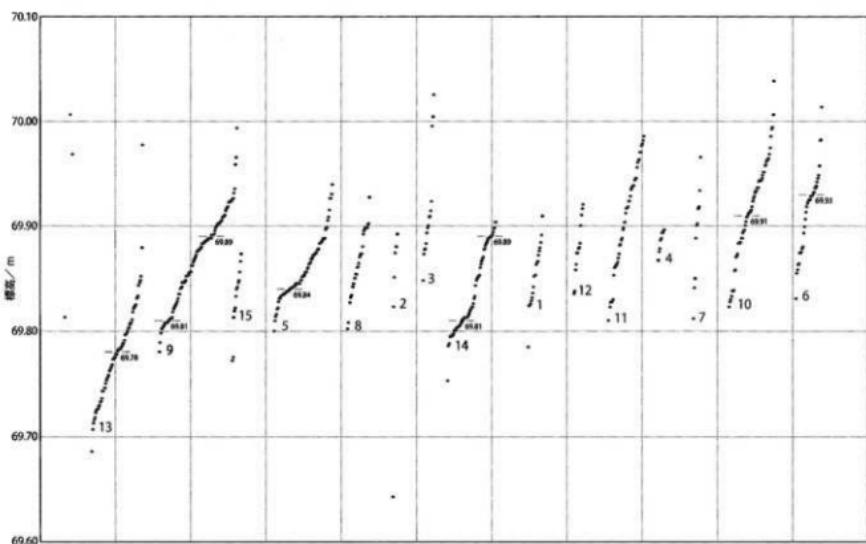
てこの高さの対比から、ブロック間の相対的な新旧関係が推定できる。同様に2速f型分布についても二つのf型分布に分解して、その各々を独立したf型分布として取り扱う事が可能である。各ブロックの新旧関係について判定したものを、第17図、第1表に示した。

第1号祭祀跡で最も古いブロックは、第13ブロックである。それ以降、9b→14b→5→9a→14a→10→6の順に続くと考えられる。本来の遺物分布面が推定できなかった第1~4、7、8、11、12、15ブロックについては、この手法からは具体的な新旧関係を導く事はできなかった。

ここまで操作で、およそ半分程度のブロックについては、可能性として相対的な年代差を抽出し、配列する事ができた。配列できなかった第1~4、第7、8、12、15ブロックについては、本来の遺物分布面がグラフからは明確に読みとれな

かった事と共に、比較的遺物が少ないと特徴も指摘する事ができる。これらの遺物量が希薄なブロックについて、その遺物組成に着目すると、いずれも手捏ね土器の出土量が少なく、土師器の出土もまた少ない。このことは、ブロックが全て等質なものではなく、ブロックの中には質の異なる幾つかの類型が存在する可能性を示唆している。

各ブロックが祭祀行為の結果として存在していると考える限りにおいては、ブロック間の質の差は、具体的な祭祀行為の質の差に原因を求める必要がある。その一方で、祭祀行為の結果としてのブロックが主体を占めるものの、そこから二次的に派生したブロックもまた存在しているとする、ブロックの質の差を成因の差に求める考え方も可能である。この点について明らかにしてゆくためには、ブロックを構成する遺物の種類とその具体的な位置関係について検討する必要がある。



第17図 1号祭祀跡出土遺物のブロック毎の原位置の推定

第1表 ブロックの新旧関係

第6ブロック
↑
第10ブロック
↑
第14 aブロック
↑
第9 aブロック
↑
第5ブロック
↑
第14 bブロック
↑
第9 bブロック
↑
第13ブロック
不明：第1～4、7、8、 11、12、15ブロック

4 祭祀の各要素の検討

前章ではブロックの年代順を想定したが、本章ではこのブロックの年代順に基づき、出土遺物について種類毎に検討した。

4-1 土師器壺の分布

第1号祭祀跡出土の土師器壺について、その分布図を第18図に示した。

土師器壺では、A群については実測可能個体が存在せず、僅かに1片が第3ブロックから検出されているのみであった。つまり、A群には土師器壺は含まれていないと見て良いであろう。

一方B群については、完形に近い壺の出土が目立ち、特に第5、9、10、11ブロックにその傾向が顕著であった。更にブロック中でも例えば第9ブロックの北側、第10ブロックの西側、第11ブロックの北側など、特定の位置に遺物の分布が集中する傾向が見られた。

また、同一個体と考えられる破片が見当たらぬもの（第18～30図の分布図中では、接合した破片、もしくは接合しないものの同一個体と考えられる破片を黒丸で、接合せず、他に同一個体と判断できる破片が存在しなかった破片を白丸で表した）は比較的少なく、各ブロックに散発的に見られる程度であるが、第11、14ブロックには、位置的にやまとまってみられた。また、第7ブロ

ックには全く含まれていなかった。

坏から見たときには、第1～4、6、7、8、12、15ブロックは、遺物を余り含まない特徴を持ったブロックであると考えられた。

4-2 土師器壺の分布

土師器壺の分布を第19図に示した。A群については、図示できる個体は出土しておらず、破片が見られるのみであった。接合する個体も第4ブロックに1組だけ見られた。つまりA群については、土師器の完形品の壺が設置された可能性は極めて低いと考えられた。

B群については、図示できる個体は第7、12、15ブロック以外に集中する傾向が強かった。第9～11ブロックからは、完形に近い壺が出土していた。図示はできなかったが、接合個体の分布は、第1～3、15以外の全てのブロックにみられた。同一個体が見つからない単独の破片は、A群の第1ブロックに特に多く見られた。

土師器壺が祭祀に用いられ地表面に設置された場合、他の器種と比べて破損しやすい状況にあると考えられる。しかし、各ブロックに含まれている土師器壺の破片を詳細に検討すると、必ずしも同一個体とは考えられないものが多く存在しており、この点について、合理的な説明が必要である。

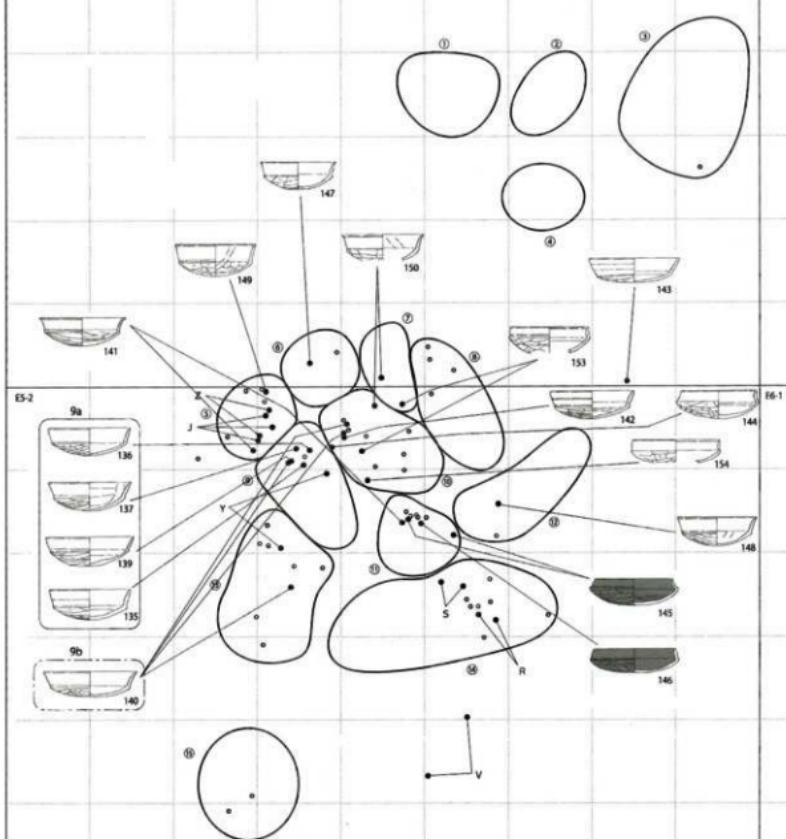
4-3 土師器高壺の分布

土師器高壺の分布を第20図に示した。土師器高壺は、出土位置が明確かつ図示できる個体が僅か1点のみであり、その1点についても完形ではなく、壺部の破片であった。

第13ブロックでは祭祀に用いられた可能性も考えられるが、基本的には、第1号祭祀跡で行われた祭祀行為の中では、高壺は必要不可欠な器種ではなかったと考えてもよいであろう。

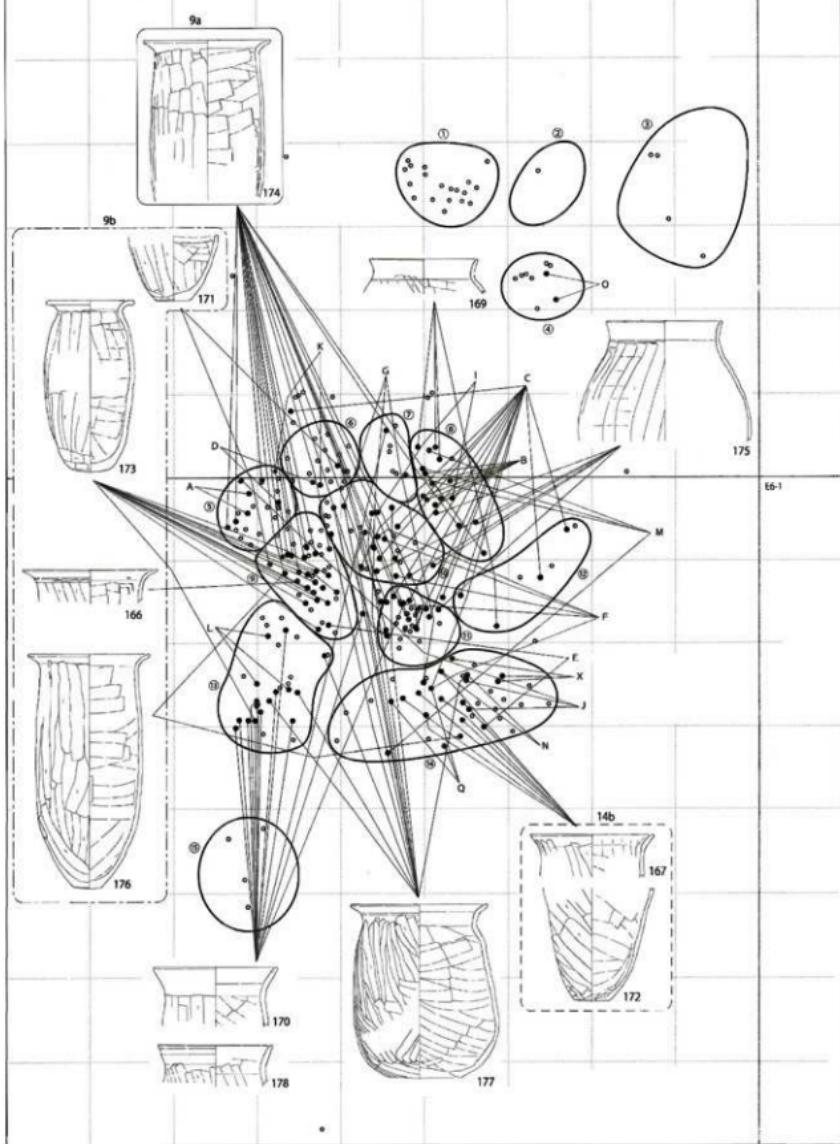
後世の擾乱により失われた高壺の個体がある事を勘案したとしても、全てのブロックで祭祀行為に高壺が用いられていたとは考える事ができないであろう。

DS-42

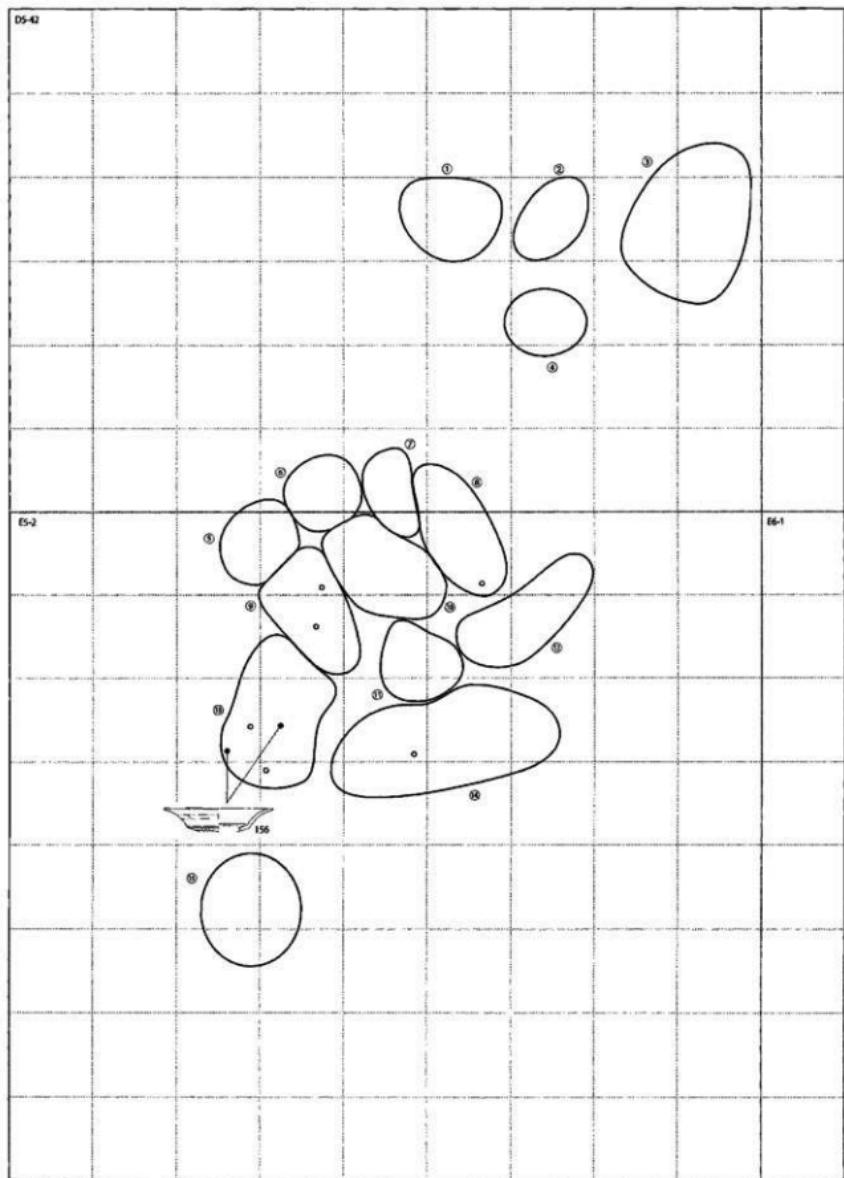


第18図 土師器壊の分布

DS-42

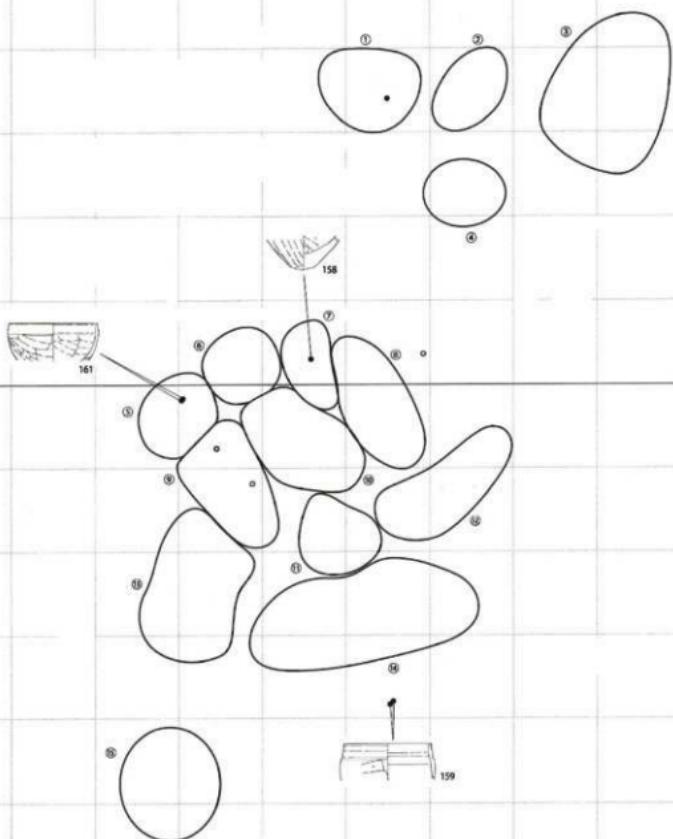


第19図 土師器甕の分布



第20図 上部器高環の分布

DS-42



ES-2

E6-1

第21図 土師器鉢の分布

4-4 土師器鉢の分布

土師器鉢の分布を第21図に示した。土師器高坏同様にA群にはほぼ見られず、第1ブロックから破片が1点出土したのみである。B群からも出土量は極めて少なく、完形品は見られない。第7ブロックから1片、第5ブロックから2片（互いに接合）、第9ブロックから2片、ブロック以外で第8ブロックの北東側から1片、第14ブロックの南側から2片（互いに接合）が出土している。

これらの状況から、高坏同様に第1号祭祀跡では、土師器鉢は必須の道具ではなかったと考えて良いであろう。

4-5 須恵器の分布

須恵器の分布を第22図に示した。壺の破片が4点出土しているが、いずれも小破片である。その中で出土位置が特定できるのは1点のみであり、第10ブロックに見られる。

須恵器についても、土師器高坏、土師器鉢同様に、第1号祭祀跡で行われた祭祀行為の中では、必須の道具ではないと考えて良いであろう。

4-6 磺の分布

磺の分布を第23図に示した。A群には見られず、B群の中で幾つかのブロックに2点程度含まれている。質量が100gを超えるものだけを抽出すると、第5ブロックに2点、第8ブロックに2点、第10ブロックに2点、第11ブロックに2点、第12ブロックに1点、第15ブロックに1点見られ、第6、7、9、13、14ブロックからは、検出できなかった。

地山には100gを超える大きさの磺が含まれていない事を考慮すると、調査区の中へどこからか持ち込まれたものであることは明らかであるが、用途は不明である。

4-7 鉄製品の分布

鉄製品の分布を第24図に示した。A群には見られずB群のみから出土している。B群についても、第5、8～10ブロックから出土しており、一部のブロックに集中している。第5ブロックでは鉄鎌11

点、刀子1点、棒状品1点、不明鉄製品1点、合計15点、第8ブロックでは、鉄鎌1点のみ、第9ブロックでは、鉄鎌2点、棒状品2点、合計4点、第10ブロックでは、棒状品1点、不明鉄製品1点、合計2点が出土している。傾向としては、第5、9の二つのブロックから集中的な出土が見られた。

4-8 石製品の分布

石製品には、白玉と有孔円板が見られ、その分布を第25図に示した。

白玉については、A群では第2、3ブロックから検出された。第2ブロックでは4点、第3ブロックでは6点、ブロック外から1点検出された。特に第3ブロックでは、特定の地点から集中的に出土している状況が明らかであった。第1、4ブロックからは検出されなかった。

一方B群では、第5、6、8～10、13～15ブロックから検出された。第5ブロック6点、第6ブロック4点、第8ブロック1点、第9ブロック7点、第10ブロック1点、第13ブロック8点、第14ブロック4点、第15ブロック3点（うち2点は互いに接合）、ブロック外から4点検出された。第7、11、12ブロックからは検出されなかった。

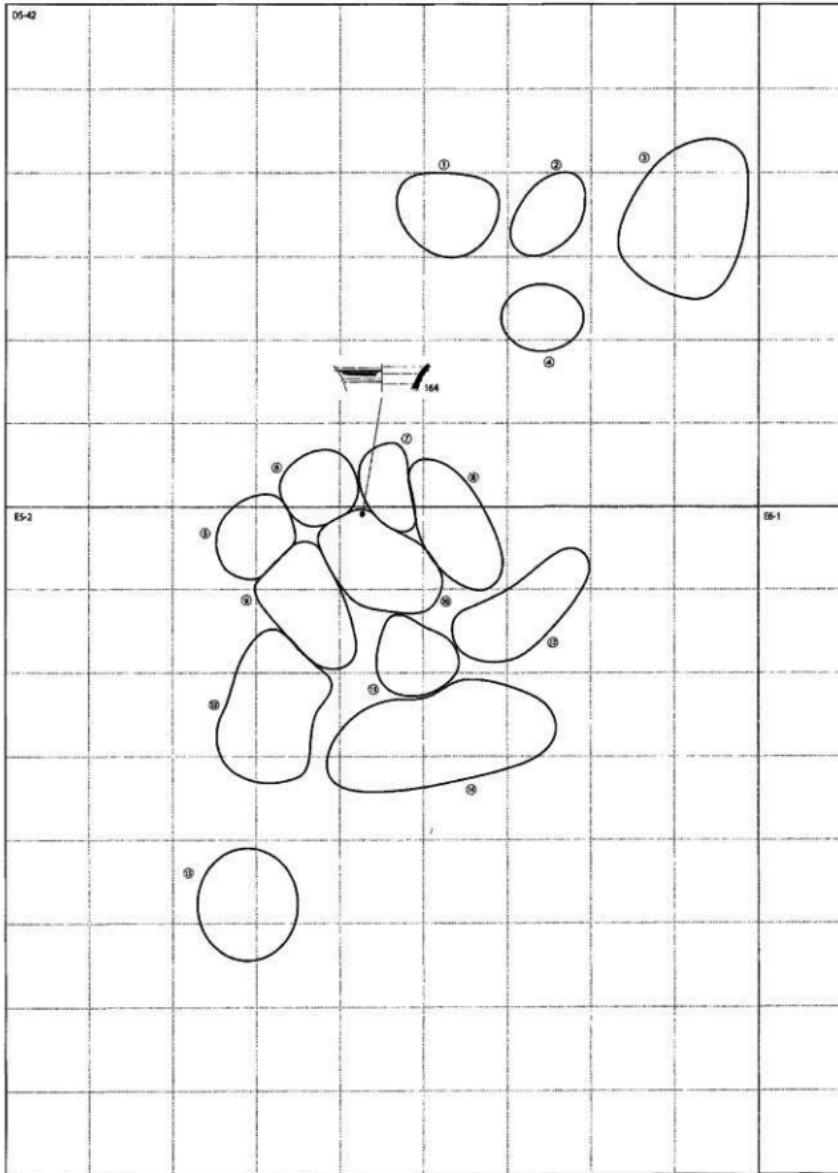
A群、B群ともに、白玉を含まないブロックが見られる事に注目しておきたい。

有孔円板は、A群の第3ブロックから2点、B群の第9ブロックと第11ブロックから各1点出土した。第3ブロックでは白玉に隣接して、第9ブロックでは、白玉とは隣接せずに出土した。

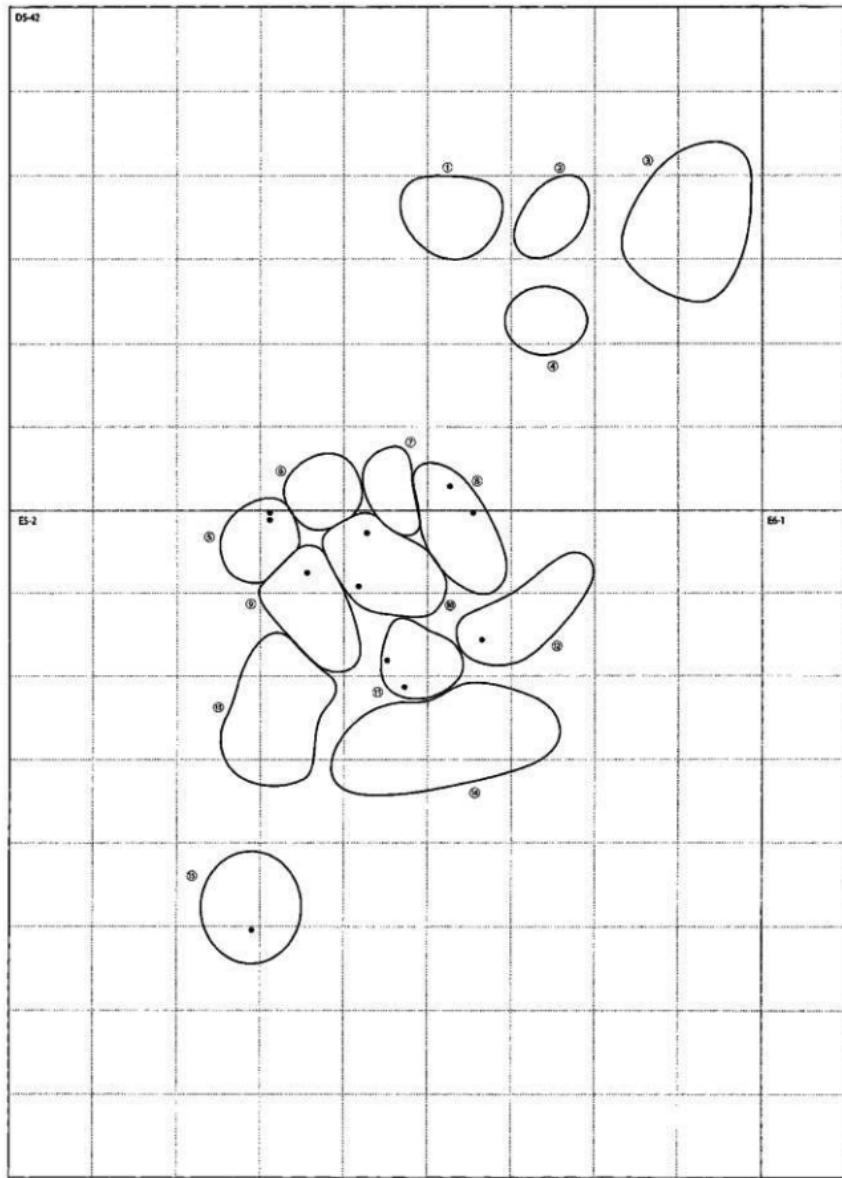
4-9 手捏ね土器の分布

手捏ね土器の分布を第26～30図に示した。A群からは検出されず、B群については、5、6、9、10、11、13、14ブロックから比較的多く検出され、7、8、12、15ブロックからは少數が検出された。

手捏ね土器についても、第5、9ブロックのように多く含まれるブロックが存在している一方で、全く含まれない、あるいは余り含まれないブロックが認められる事に注目しておきたい。



第22図 須患者の分布



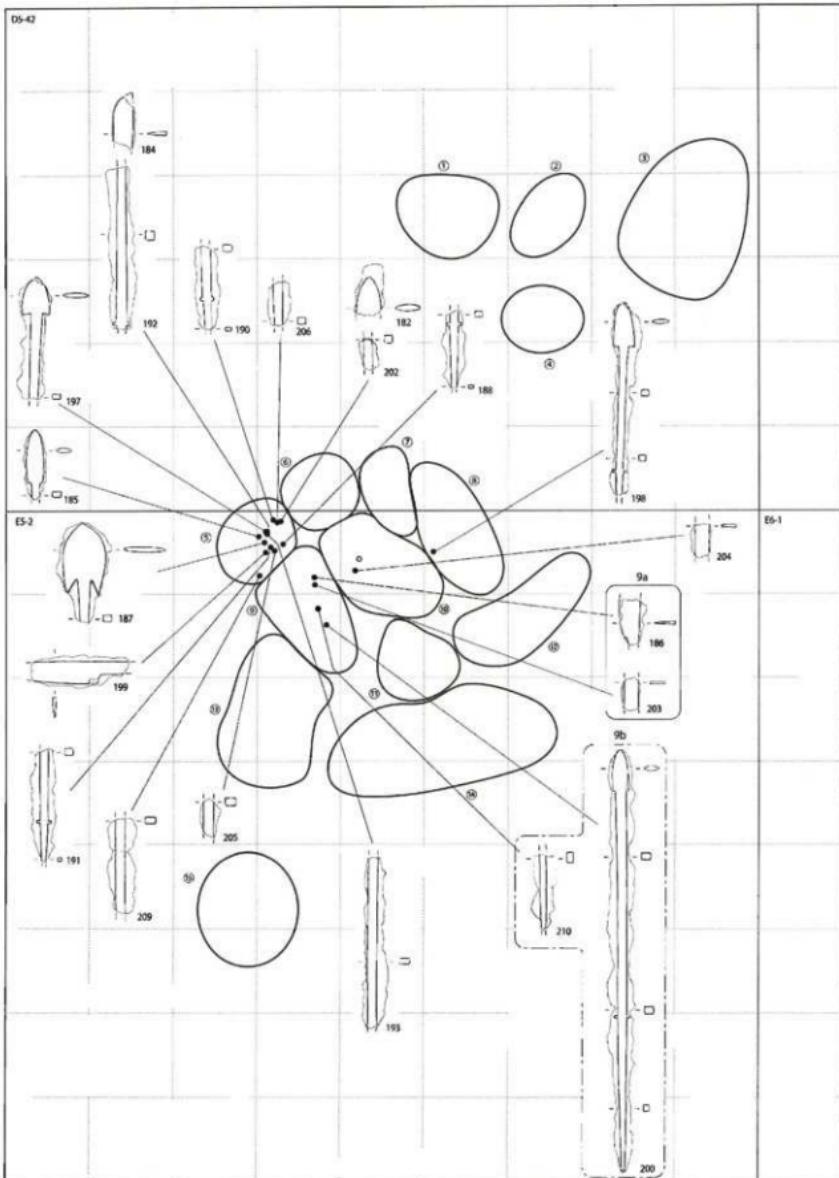
第23図 卵の分布

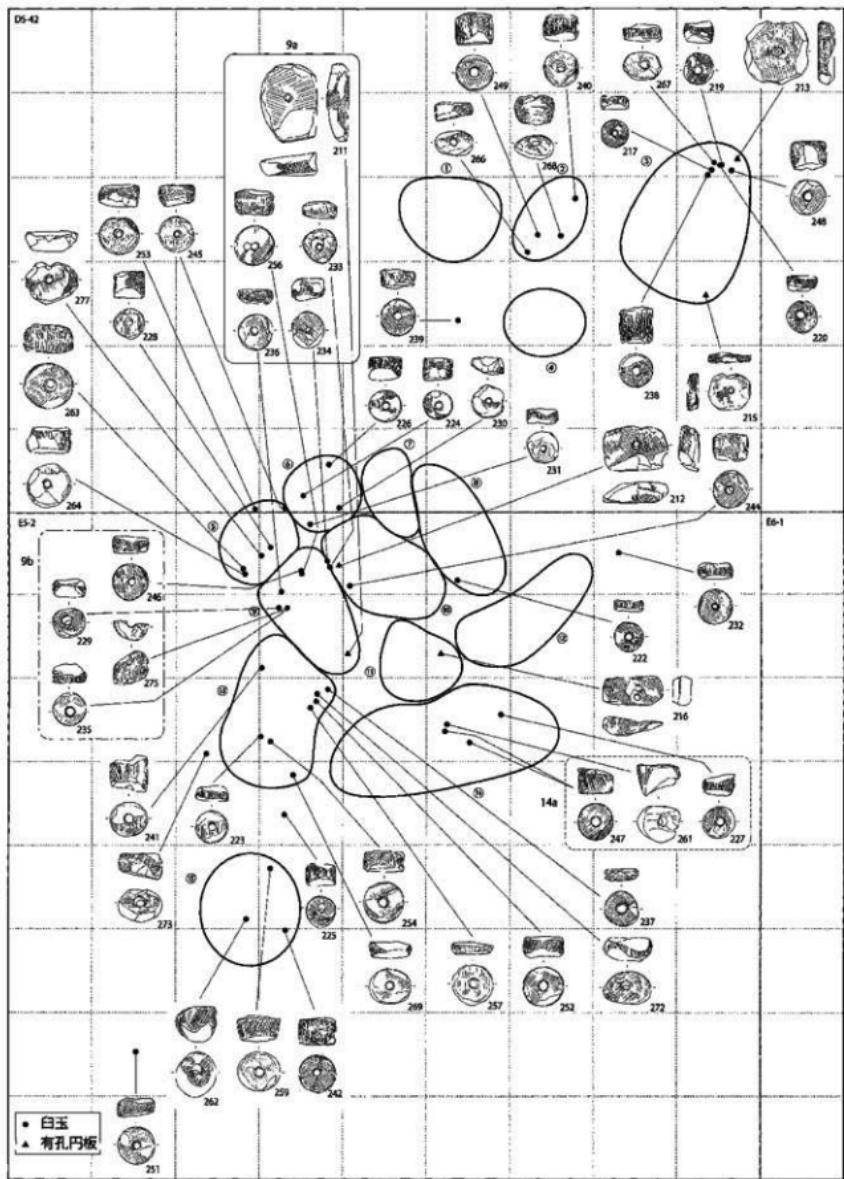
DS-42

ES-2

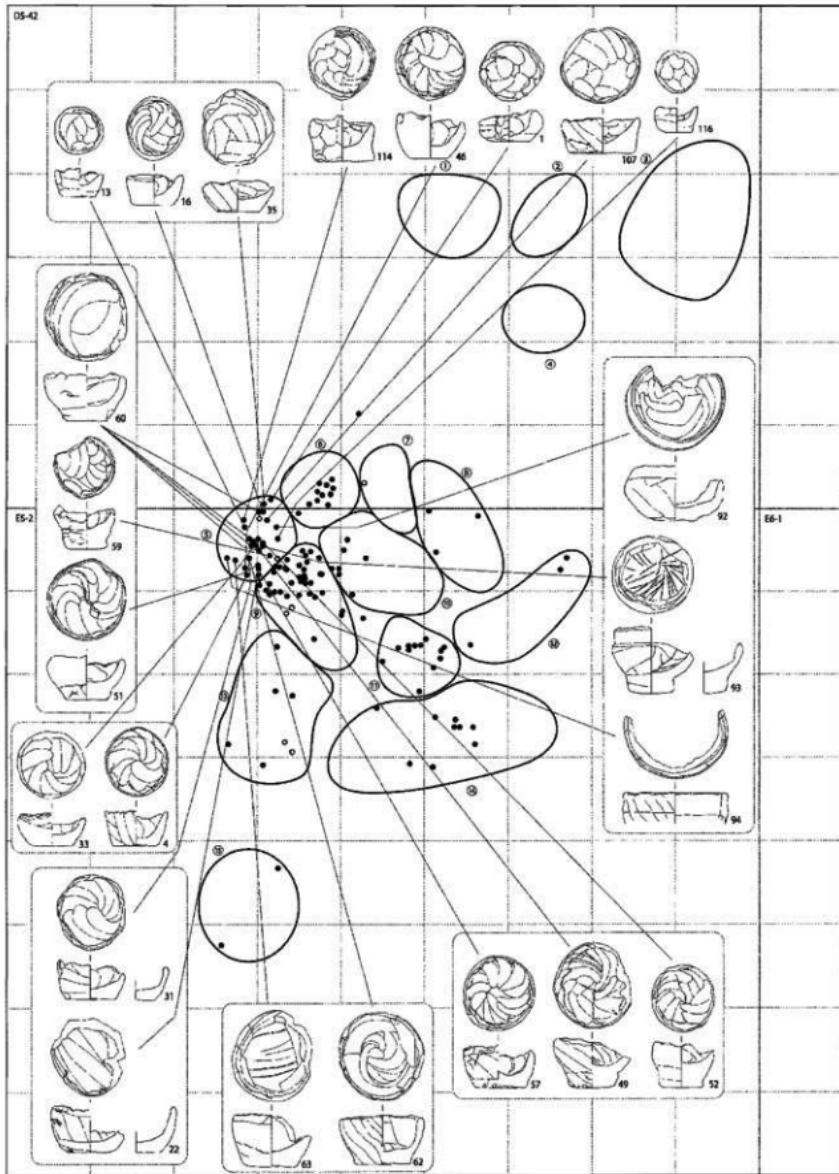
ES-1

第24図 鉄製品の分布

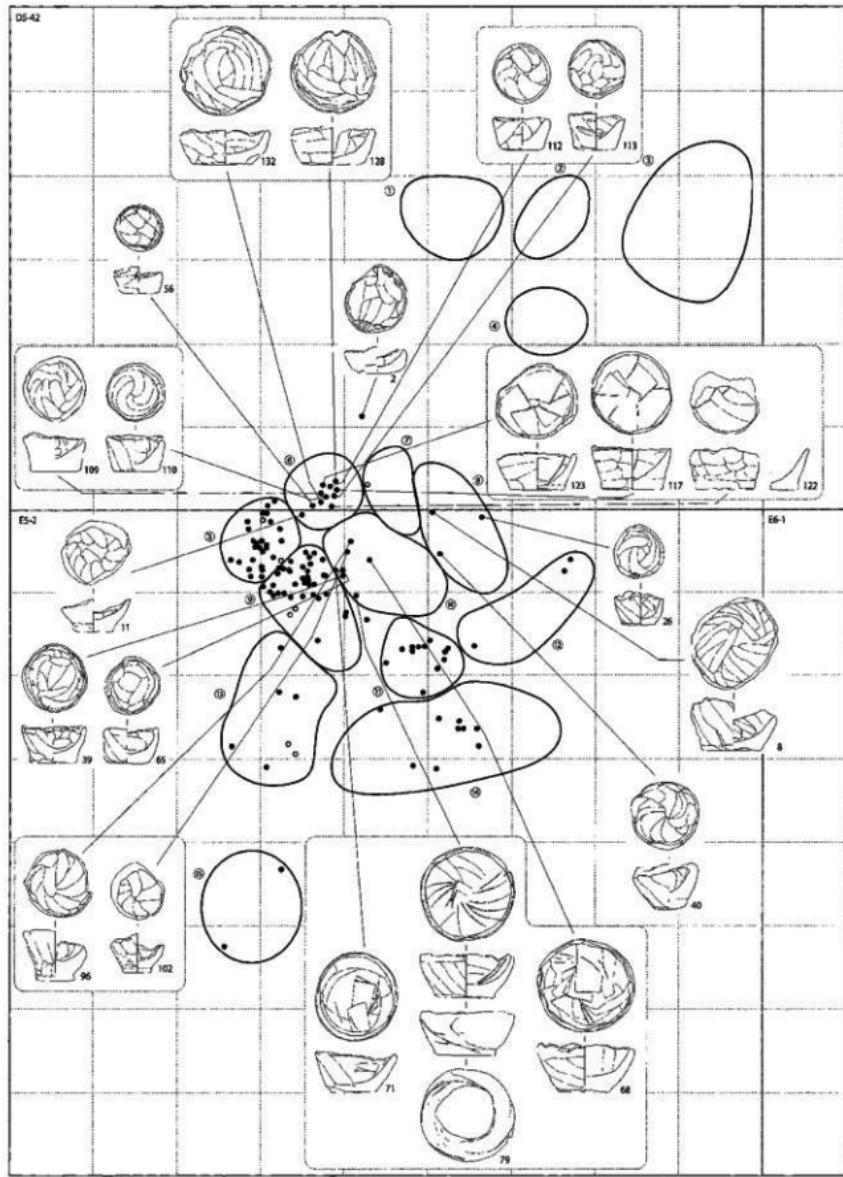




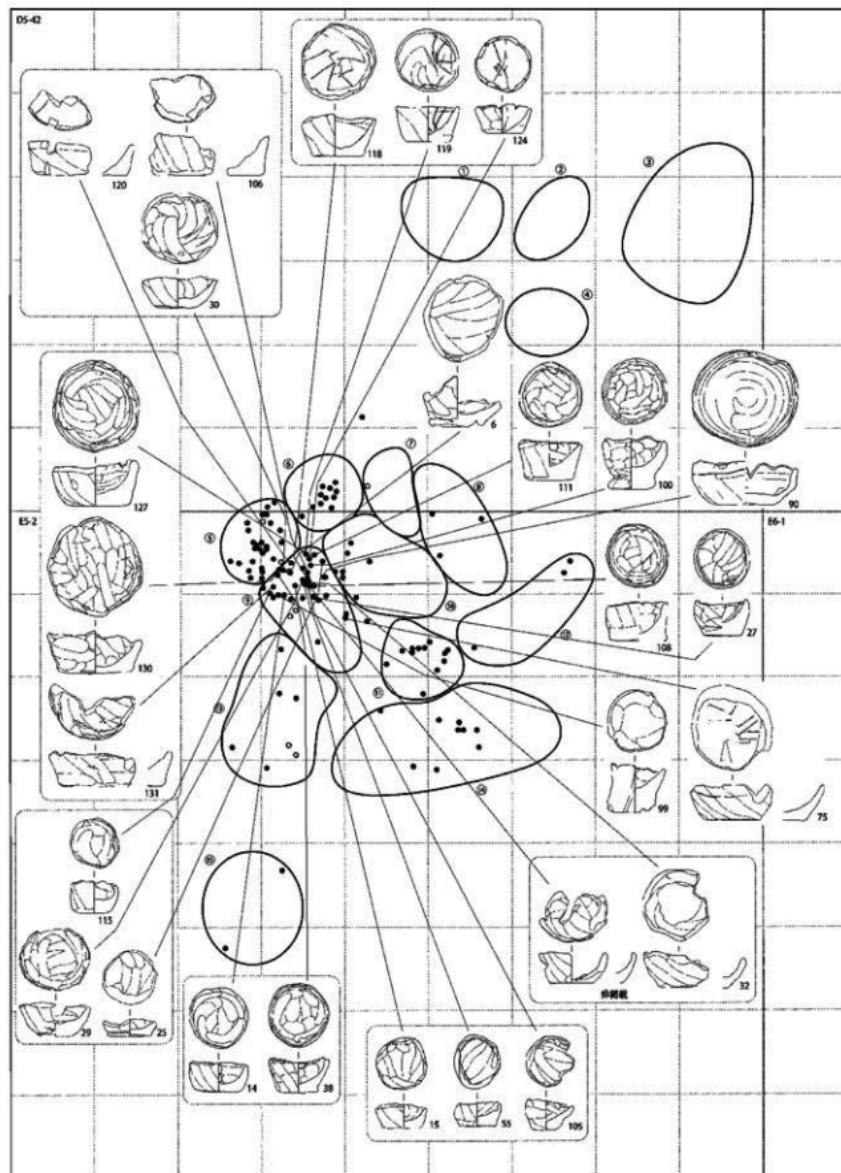
第25図 石製品の分布



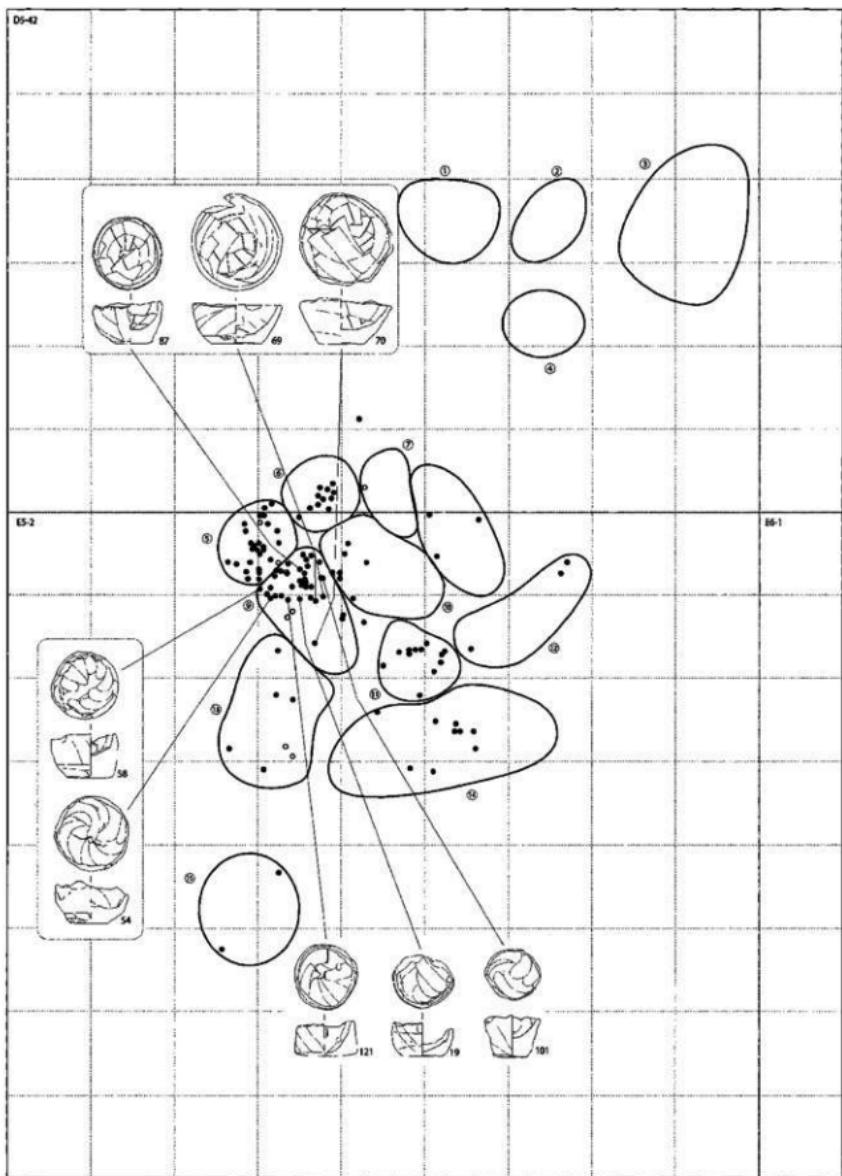
第26図 手捏ね土器の分布（1：第5ブロック）



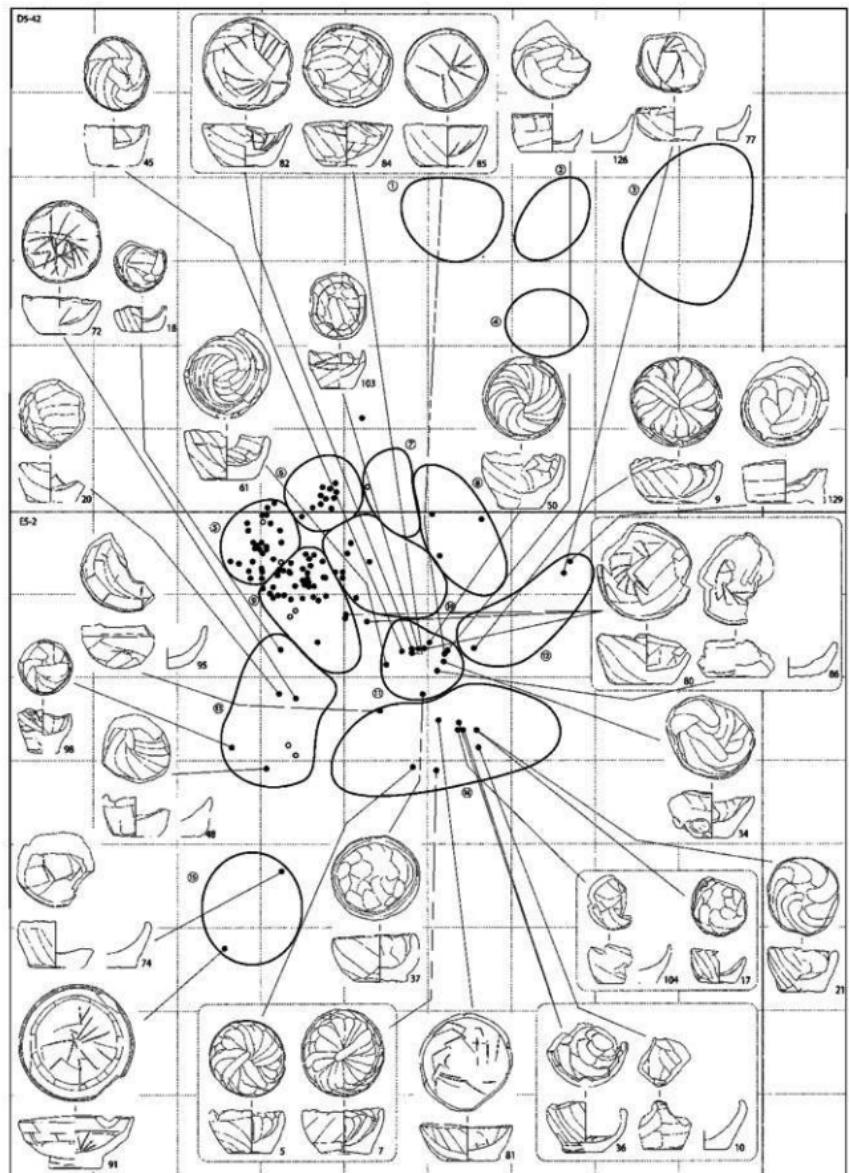
第27図 手捏ね土器の分布（2：第6、8、10ブロック）



第28図 手捏ね土器の分布（3：第9a ブロック）



第29図 手捏ね土器の分布 (4 : 第9b ブロック)



第30図 手捏ね土器の分布 (5 : 第11~15ブロック)

5 ブロックと主要遺物の新旧関係

前章で各遺物毎の分布傾向について、その概要を説明した。本章では主要な遺物について、ブロックの新旧関係に基づき、変遷を検討した。

5-1 手捏ね土器のブロック毎の傾向

以下では手捏ね土器について、古いと想定したブロックから順番に検討した。ここでは特に、同一ブロック中に含まれる手捏ね土器について、形態と胎土の同一性に着目した。

第13ブロック（第33図）

5個体を図示した。いずれも形態的なまとまりを欠いていた。

第9bブロック（第33図）

8個体を図示した。胎土と成形、調整がほぼ共通した2~3個一組のセット関係が認められた。底部がかなり厚く菊花状引き出しを持ったものと、弧状ヘラ成形が行われたものが認められた。

第5ブロック（第33図）

23個体を図示した。大半がセット関係を示すとともに、大半に菊花状引き出しが認められた。

第14aブロック（第32図）

8個体を図示した。全体の出土数量は少ないが、大半がセット関係を示していた。大型のものが主体となるとともに、端正な菊花状引き出しを持ったものが明瞭に認められた。弧状ヘラ成形のものも見られた。

第9aブロック（第32図）

27個体を図示した。引き続き大半がセット関係を示していた。弧状ヘラを持つものが引き続き見られた。菊花状引き出しが形骸化し、引き出し痕跡が雜になっていた。形態も小型化していた。壺型や壺型なども見られた。

第10ブロック（第31図）

7個体を図示した。弧状ヘラを持つものが主体を占めていた。高壺型も見られた。全体に小型化が進展し、菊花状引き出しの形骸化も更に進んでいた。

第2表 ブロック毎の手捏ね土器の特徴

6ブロック	小型化・壺や壺主体	浅・新
10, 9aブロック	弧状ヘラ 菊花状引き出し小型化形骸化 壺型、壺型、高壺型出現	
14a, 5ブロック	大型化・大半セット 引き続き弧状ヘラ 菊花状引き出し主体	
9bブロック	セットの出現 菊花状 弧状ヘラ	
13ブロック	バラバラ	深・古

第6ブロック（第31図）

10個体を図示した。小型の器種である壺や壺が主体であった。大半がセット関係を示していた。

5-2 手捏ね土器の変遷

以上の傾向から、第1号祭祀跡出土の手捏ね土器について、以下のよう変遷を想定した。

1段階：（13ブロック）

小型のものが主体

セット関係が不明確

2段階：（9bブロック）

セット関係が出現する

弧状ヘラ、菊花状引き出し出現

3段階：（14a, 5ブロック）

菊花状引き出し大型化

大半がセット関係になる

4段階：（10, 9aブロック）

菊花状引き出しが小型化、形骸化する

壺型、壺型、高壺型が目立つ

5段階：（6ブロック）

壺型、壺型が主体、セット関係維持

5-3 変遷に関する各段階の意味

1段階については、各種の祭祀が行われてはいるものの、第1号祭祀跡を使用した祭祀が未だ定式化していないと推定した。

2段階については、手捏ね土器のセット関係が明確になった事から、第1号祭祀跡を使用した祭祀が定式化したと推定した。また、土師器模倣坏

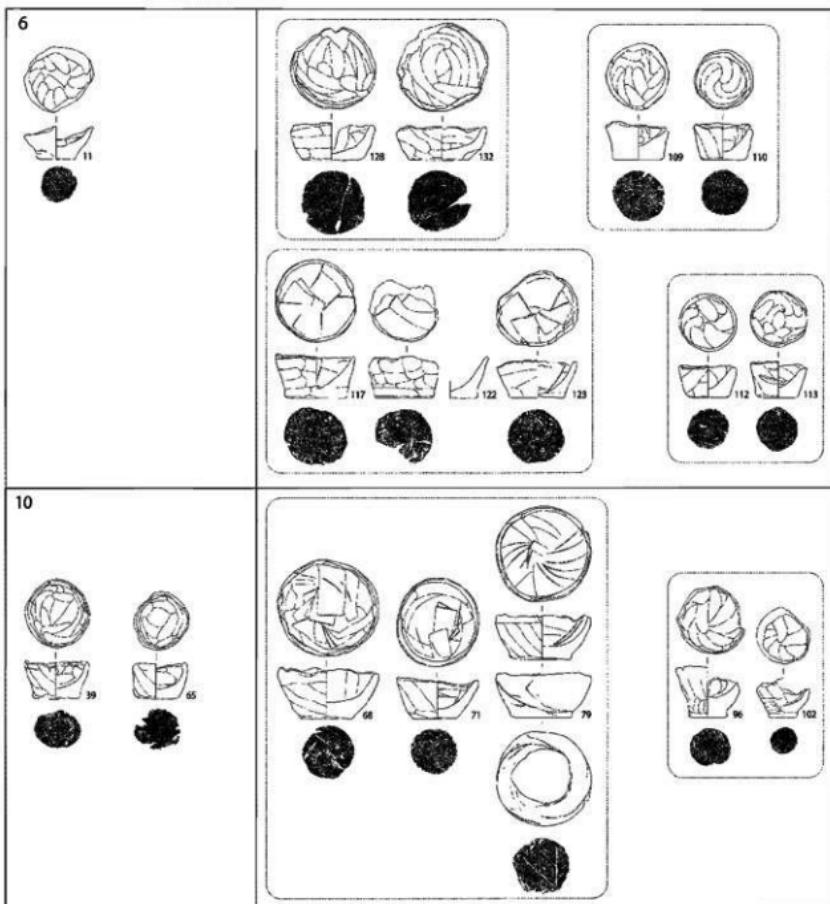
の製作工程を踏襲した手捏ね土器が見られる事から、土師器环製作者との強い関係の中で、手捏ね土器が作られたと推定した。

3段階については、セット関係の確立と菊花状引き出しの大型化から、集落の中で祭祀行為が安定して実施されていると推定した。

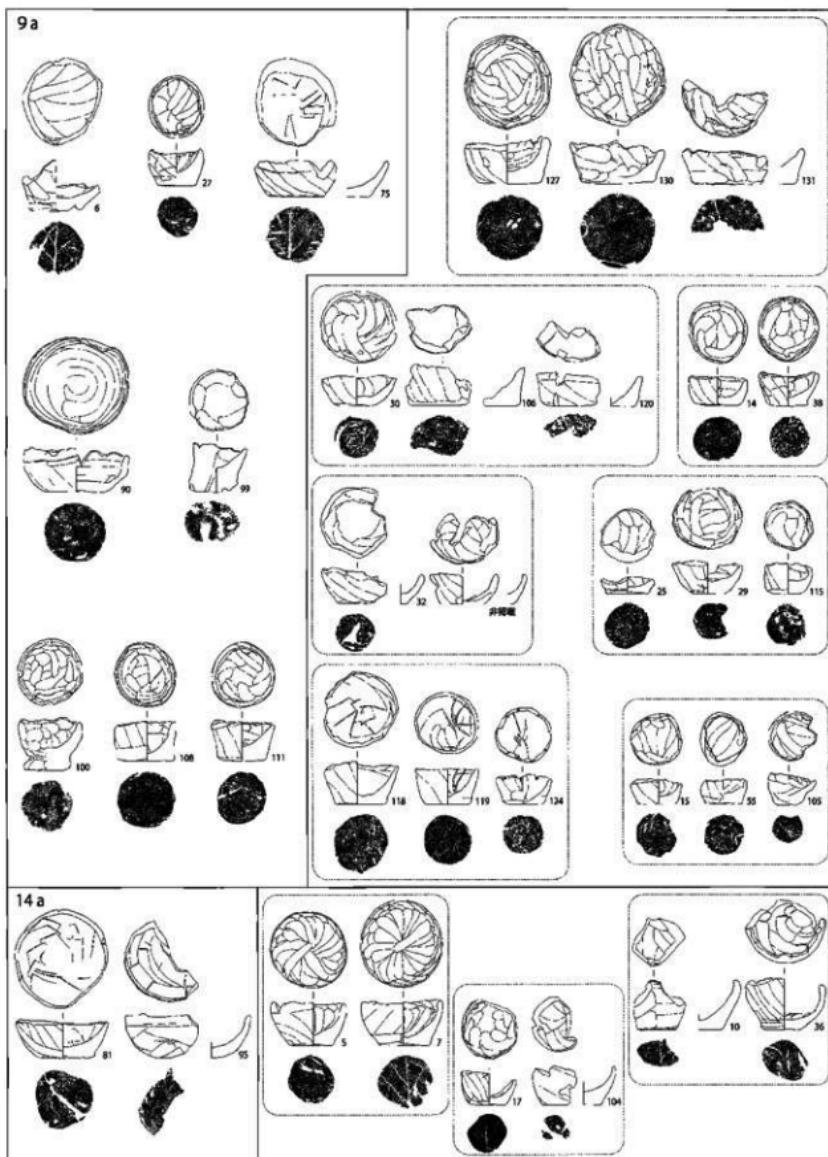
4段階については、祭祀行為の形骸化が急速に

進んだと推定した。集落単位での祭祀と、集落を越えたより大きな単位で行われる祭祀との間の矛盾が、集落単位での祭祀の意義を急速に失わせている事が原因と推定した。

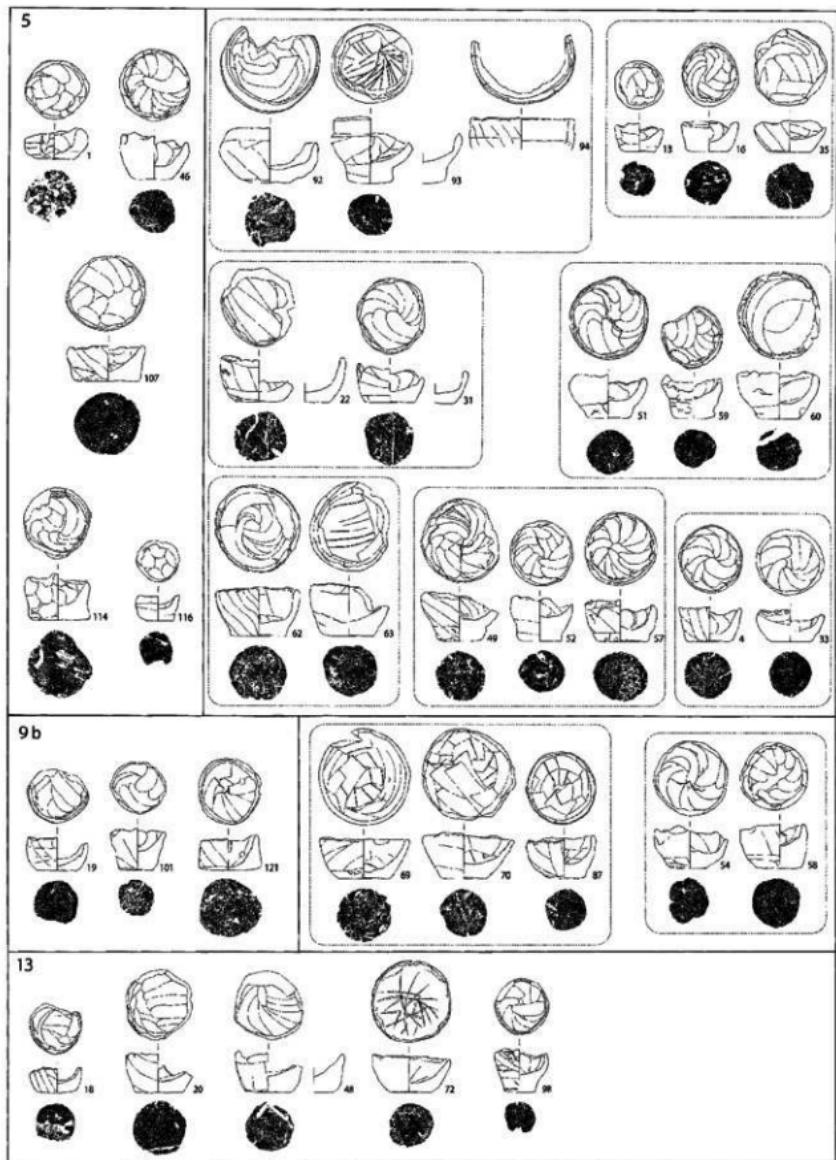
5段階については、手捏ね土器製作の簡略化とともに、手捏ね土器を使用した祭祀の形骸化が、より一層進展したと推定した。



第31図 ブロック毎の手捏ね土器のセット関係（1）



第32図 ブロック毎の手捏ね土器のセット関係（2）



第33図 ブロック毎の手捏ね土器のセット関係（3）

5-4 白玉について

第1号祭祀跡からは、白玉が61点出土した。その中で、出土位置が明確なものは49点である。この49点について母岩別、孔径別、最大径別に分類して、帰属ブロックとの関係について検討した。

まず、対象となる白玉と帰属ブロックとの関係を第3表に示した。統いて49点の白玉について、色調などから母岩を識別し、第4表に示した。なお表中の番号は、報文の挿図番号を用いた。

母岩の特徴は以下の通りである。

母岩A……灰黄～灰白色で部分的に白や緑が見られる。質はやや多孔質で、黒い斑点が見られる。

母岩B……灰白から灰色。質は緻密。

母岩C……灰色で白と黒のまだら状。質は比較的緻密。

母岩D……灰～灰白色で若干褐色が混じる。質は比較的緻密。

母岩E……灰白～オリーブ灰色。質は緻密。

母岩F……灰白色で薄黄緑色を帯びる。質は若干多孔質。

母岩G……灰～白色で若干褐色が混じる。質は非常に多孔質。

母岩H……灰～灰白色。質は比較的緻密。

その他……類型化が困難であったもの。

次に、ブロック内での母岩のあり方を、第5表に示した。これを推定したブロックの年代順に並べたものが第6表である。第6表を見ると、相対的に占く形成されたと推定したブロックではF、Gの母岩が多く見られ、次いでC、Eの母岩が見られるようになり、相対的に新しく形成されたと推定したブロックでは、A、Bが主体を占めるようである。

統いて、白玉の孔径をブロック毎に並べたものを第7表に示した。計測に際しては、木口面に現れた孔の径について、穿孔部から平坦面に至る曲線の変換点に着目し、この変換点を計測した。

第3表 白玉の各ブロックへの帰属

ブロック1	
ブロック2	240 249 266 268
ブロック3	217 219 220 238 248 267
ブロック4	
ブロック5	228 245 253 263 264 277
ブロック6	224 226 230 231
ブロック7	
ブロック8	222
ブロック9a	233 234 236 256
ブロック9b	229 235 246 275
ブロック10	244
ブロック11	
ブロック12	
ブロック13	223 237 241 252 254 257 269 272
ブロック14a	227 247 261
ブロック14b	
ブロック15	242 259 262
ブロック外	225 232 239 251 273

第4表 白玉の母岩別分類

母岩A	230 231 233 234 244 245
母岩B	225 226 228 224
母岩C	236 246
母岩D	259 262
母岩E	223 227 240 253
母岩F	239 247 254
母岩G	229 235 241 248 249 252 256 264 269
母岩H	266 267 268 217 219 220 222 232 237 238 242
その他	251 257 261 263 272 273 275 277

第5表 各ブロックでの母岩のあり方

ブロック2	E、G、H、H
ブロック3	他、他、他、他、G、H
ブロック5	B、A、E、他、G、他
ブロック6	B、B、A、A
ブロック8	他
ブロック9a	A、A、C、G
ブロック9b	G、G、C、他
ブロック10	A
ブロック13	E、他、G、G、F、他、G、他
ブロック14a	E、F、他
ブロック15	他、D、D
ブロック外	B、他、F、他、他

数値は、上下の木口面で計測したものの平均である。更に、孔径を以下の基準で類型化したもの第8表に、また、ブロックの年代順に並べたものを第9表に示した。

第6表 ブロック年代順での母岩のあり方

新 旧	ブロック 6	B、B、A、A
	ブロック 10	A
	ブロック 9a	A、A、C、G
	ブロック 14a	E、F、他
不 群	ブロック 5	B、A、E、他、G、他
	ブロック 9b	G、G、C、他
	ブロック 13	E、他、G、G、F、他、G、他
	ブロック 2	E、G、H、H
群	ブロック 3	他、他、他、他、G、H
	ブロック 8	他
	ブロック 15	他、D、D
	ブロック外	B、他、F、他、他

1 ······ 1.5以上 2.0未満

2 ······ 2.0以上 2.5未満

3 ······ 2.5以上 3.0未満

4 ······ 3.0以上 3.5未満

5 ······ 3.5以上 4.0未満

孔径については、概ね古い段階では大きく、新しい段階では小さくなる傾向が見られた。

統いて、各ブロックに含まれている白玉について、最大径を調べて第10表に示した。これを推定したブロックの年代順に並べたものが第11表である。更に、最大径を以下の基準で類型化し、ブロックの年代順に並べたものを第12表に示した。

1 ··· 9.0以上10.0未満

2 ··· 10.0以上11.0未満

3 ··· 11.0以上12.0未満

4 ··· 12.0以上13.0未満

5 ··· 13.0以上14.0未満

6 ··· 14.0以上15.0未満

7 ··· 15.0以上16.0未満

8 ··· 16.0以上17.0未満

第11、12表からは、白玉の最大径は古い段階では大きく、新しい段階では小さくなる傾向が認められた。

以上から、第1号祭祀跡から出土した白玉の経時的な変化の方向性について、当初は孔径も最大径も比較的大きく、時とともに次第に小さくなる傾向が見られる事がわかった。

第7表 各ブロックの白玉の孔径

ブロック 2	2.85	3.55	2.75	3.85
ブロック 3	2.10	3.30	3.45	3.05
			3.00	
ブロック 5	2.70	2.50	2.80	3.90
			2.60	
ブロック 6	2.95			
ブロック 8	2.7			
ブロック 9a	2.20	1.95	2.35	3.20
ブロック 9b	3.25	3.30	2.40	-
ブロック 10	2.65			
ブロック 13	2.70	3.90	3.20	3.35
	3.35	3.10	2.95	
ブロック 14a	3.25	3.70	3.00	
ブロック 15	2.60	3.20	3.60	
ブロック外	2.65	2.00	2.95	2.60
	3.50			

第8表 各ブロックの白玉の孔径の類型化

ブロック 1	
ブロック 2	3、5、3、5
ブロック 3	2、4、4、4、4、4
ブロック 4	
ブロック 5	3、2、2、5、3、3
ブロック 6	3、3、2、2
ブロック 7	
ブロック 8	3
ブロック 9a	2、1、2、4
ブロック 9b	4、4、2、-
ブロック 10	3
ブロック 11	
ブロック 12	
ブロック 13	3、5、4、4、4、4、4、3
ブロック 14a	4、5、4
ブロック 14b	
ブロック 15	3、4、5
ブロック外	3、4、3、3、5

第9表 ブロック年代順での孔径のあり方

新	ブロック 6	3、3、2、2
	ブロック 10	3
	ブロック 9a	2、1、2、4
	ブロック 14a	4、5、4
旧	ブロック 5	3、3、3、5、3、3
	ブロック 9b	4、4、2、-
	ブロック 13	3、5、4、4、4、4、3
	ブロック 14b	
不	ブロック 2	3、5、3、5
	ブロック 3	2、4、4、4、4、4
	ブロック 8	3
	ブロック 15	3、4、5
詳	ブロック外	3、4、3、3、5

調整や成形については、経時的な変化を捉える事ができなかった。

第10表 各ブロックの白玉の最大径

ブロック1	
ブロック2	11.0 12.4 12.6 13.0
ブロック3	9.1 10.0 10.3 11.2 12.0 12.9
ブロック4	
ブロック5	10.1 12.0 13.2 16.6 14.8 -
ブロック6	10.0 11.0 10.7 10.6
ブロック7	
ブロック8	9.7
ブロック9a	11.4 10.9 11.6 13.1
ブロック9b	10.9 11.0 11.7 12.0
ブロック10	11.9
ブロック11	
ブロック12	
ブロック13	10.8 11.5 12.6 13.5 13.6 13.7 13.9 15.9
ブロック14a	10.9 11.7 14.2
ブロック14b	
ブロック15	12.1 14.3 13.7
ブロック外	9.9 11.6 11.7 12.4 14.7

第11表 ブロック年代順での最大径のあり方

新	ブロック6	10.0 11.0 10.7 10.6
	ブロック10	11.9
	ブロック9a	11.4 10.9 11.6 13.1
	ブロック14a	10.9 11.7 14.2
	ブロック5	10.1 12.0 13.2 16.6 14.8
	ブロック9b	10.9 11.0 11.7 12.0
旧	ブロック13	10.8 11.5 12.6 13.5 13.6 13.7 13.9 15.9
	ブロック2	11.0 12.4 12.6 13.0
	ブロック3	9.1 10.0 10.3 11.2 12.0 12.9
	ブロック8	9.7
	ブロック15	12.1 14.3 13.7
	ブロック外	9.9 11.6 11.7 12.4 14.7
詳		

第12表 ブロック年代順での最大径のあり方

新	ブロック6	2、3、2、2
	ブロック10	3
	ブロック9a	3、2、3、5
	ブロック14a	2、3、6
	ブロック5	2、4、5、8、6
	ブロック9b	2、3、3、4
旧	ブロック13	2、3、4、5、5、5、5、5、7
	ブロック2	3、4、4、5
	ブロック3	1、2、2、3、4、4
	ブロック8	1
	ブロック15	4、6、5
	ブロック外	1、3、3、4、6
詳		

5-5 ブロックの新旧関係の推定

前節で、第1号祭祀跡出土の白玉について、母岩、孔径、最大径と相対的な新旧関係について検討し、一定の変化の方向性を見出した。ここでは、この変化の方向性を元にして、第10図に示したブロック毎の遺物の標高を参照しながら、新旧関係が不詳のブロックについて、その相対的な時期を推定した。

まず母岩から見た場合、第2、3ブロックについては、相対的に古く第13、9b、5ブロック相当であると推定した。

次に孔径から見た場合、第2ブロックは第5ブロック相当、第3ブロックは第13、9bブロック相当、第8ブロックは第5ブロック相当、第15ブロックは第13ブロック相当と推定した。

更に最大径から見た場合、第2ブロックは第13、9bブロック相当、第3ブロックは第9bブロック相当、第15ブロックは第13ブロック相当と推定した。

統いて、前々節で見たように、手捏ね土器の変化の方向から、新旧関係不詳のブロックについて検討した。

まず第8ブロックは、第5ブロック相当、第11、15ブロックは、第13、9b、5、14aブロック相当と推定した。また第12ブロックは、第14aブロック相当と推定した。

以上を基にして、第10図に示した各ブロックからの出土遺物の標高も参照し、第1号祭祀跡から検出した各ブロックの相対的な新旧関係について、以下のように推定した。

(古) 13→9b→5、15→2、3、8→12、14a
→11→9a→10→6 (新)

なお、第5章2節で示したように、手捏ね土器のあり方から推定すると、第5ブロックから第14aブロックが形成された時期が、第1号祭祀跡で行われたであろう祭祀行為が盛行した時期である。このことは、第5ブロックから鉄製品が多く出土した事実関係と調和的である。

6 小結

川越田遺跡から検出された第1号祭祀跡は、古墳時代後期に営まれた祭祀の跡である。調査時には、手捏ね土器、白玉、土師器など合計600点余りを含む厚さ20cm程度の包含層として検出されたが、明確な遺構は確認できなかった。

検出された土師器壺、甕類から推定すると、およそ6世紀中頃から後半にかけて30~50年程度の間、祭祀行為が行われていたと考えられた。また、遺物全体の分布から、祭祀跡は2群に別れ、更に15個のブロックに分割できた。具体的な祭祀行為は、ブロックと呼称した比較的小さな1m以内の範囲で行われたと推定した。この祭祀に用いられた器材は、当初は地表面に設置されていたが、後世の擾乱等によって層中に分散した結果、立体的で広範囲な遺物分布として、祭祀跡が識別された。各ブロックについては、含まれている遺物の標高、白玉の属性、手捏ね土器の属性などから相対的な新旧関係を推定した。具体的には、

(古) 13→9b→5、15→2、3、8→12、14a
→11→9a→10→6 (新)

と考えられた。

各ブロックに含まれる手捏ね土器を分析し、胎土と形態が類似した2~3個一組のセットを見いだす事ができた。各ブロックには、この胎土と形態が類似した2~3個一組の手捏ね土器のセットが2~10組み程度含まれていた。

具体的な祭祀行為は、土師器から推定した継続年数とセット数から考えて、例えば、年1回手捏ね土器の1セットを所定の位置に配置して行われるとした場合、2~10年程度同じ地点で祭祀が実施された後、重複しない範囲で位置の変更が行われ、同様の行為が2~10年程度継続され、その後にまた移動するというような事が50年程度のあいだ反復して行われたと想定した。

白玉は、出土数量から見て、1年に1個程度しか使用されておらず、材料の滑石を入手すると、

その材料を元にして数年程度は使用する事が可能であったと考えられる。材料を消費し尽くすと、再び滑石を入手する努力が成されたのであろう。このような頻度でしか製作されなかつたために、白玉の類型化が困難であり、大雑把な変化の傾向が見られる程度であったと想定したい。また母岩を共有する白玉は全体の7割弱であり、残り3割強は母岩を共有しない白玉である。母岩を共有しない白玉の存在は、小さな母岩の採取と、それを用いた白玉の製作を考えた。なお同一母岩に属する白玉が比較的近接して出土しながらも、しばしばブロックの境界を超えている点については、白玉の大きさと形態を考慮して、祭祀後の移動と考えておきたい。

ブロックは全てが等質なわけではなく、例えば、第1~4ブロック、第7、8、12、15ブロックなどからは、手捏ね土器や土師器は殆ど見いだされなかった。このようなブロックについては、直接的な祭祀行為に由来するブロックではなく、祭祀行為の結果、地表に散乱した土器類を片づけた際に形成されたブロックである可能性を指摘しておきたい。

各ブロックに含まれる主要な遺物である手捏ね土器、白玉、土師器について、ブロック毎に検討した結果、それぞれ大きな矛盾無く一定の変化の傾向が認められた事から、推定したブロックの相対的な年代は、概ね妥当であると考えて良いであろう。手捏ね土器についても、型式論的な配列は難しいが、ブロック単位で比較する事により、極めて大雑把ではあるが変化の方向性が理解できた。

(以下次号に続く)

*1 文献は次回掲載する。

*2 分担は、以下のとおりである。

第1章福田

第2章赤熊

第3~7章大原、岡本、澤口

研究紀要 第27号

2013

平成25年3月25日 印刷

平成25年3月29日 発行

発行 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 関東図書株式会社